五代東田遺跡

五代南部工業団地（拡張）土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７.３

前橋市教育委員会

五代東田遺跡

五代南部工業団地（拡張）土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７.３

前橋市教育委員会

はじめに

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、縄文時代の遺跡も、市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する五代東田遺跡は、本市中央部の五代町にあります。五代南部工業団地が建設された五代町は、赤城山南麓の自然に恵まれた地で、縄文時代をはじめ、様々な時代の痕跡が多く残る地域です。今回の調査では、平安時代の水田跡、また水田に関連して畔や用水路も確認できました。現状のままでの保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められことに厚くお礼申しあげます。

平成２９年３月

前橋市教育委員会
教育長　　**佐　藤　博　之**

例　言

1．本報告書は、五代南部工業団地（拡張）土地区画整理事業に伴う五代東田遺跡発掘調査報告書である。
2．調査は、前橋市の委託を受け、前橋市教育委員会の指導･監督のもと、有限会社毛野考古学研究所が実施した。
3．発掘調査の要項は次のとおりである。

遺　跡　所　在　地：群馬県前橋市五代町 967 他
遺　　跡　　略　　称：28 C 48
発　掘　調　査　面　積：2,030 ㎡
発　掘　調　査　期　間：平成 28 年５月 17 日～平成 28 年７月 15 日
整理・報告書作成期間：平成 28 年７月 18 日～平成 29 年３月 24 日
発 掘 ・ 整 理 担 当 者：日沖剛史・李スルチョロン（有限会社毛野考古学研究所）

4．本遺跡に関わる遺構測量は、小出拓磨・亀田浩子（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
5．本書の編集は、日沖・李（有限会社毛野考古学研究所）が行った。原稿執筆は、Ⅰを小峰　篤（前橋市教育委員会）、Ⅱ－２・Ⅵを李、その他を日沖が担当した。なお、自然科学分析においては株式会社火山灰考古学研究所に委託し、その成果を巻末に掲載した。
6．調査に関わる資料は、一括して前橋市教育委員会文化財保護課が保管している。
7．発掘調査・整理作業に関わった方々は、下記のとおりである。（五十音順・敬称略）

【発掘調査】 井口ヒロ子　石倉稔夫　碓井俊夫　岡庭秋男　小関泰洋　鈴木正　勅使川原幸枝　永井述史
中島勝由　萩原秀子　橋元裕児　伴場りく　森山恵子　森山孝男
【整理作業】 亀田浩子

8．発掘調査の実施から報告書刊行に至る間、以下の方々に御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

早田勉　中村岳彦

凡　例

1．挿図中の北方位は座標北を示し、座標値は日本測地系（国家座標第Ⅸ系）に基づいている。
2．調査区に被せる方眼（グリッド）は、本遺跡地周辺の原点としているＸ=46,200・Ｙ=−64,700 を起点としてＸ０･Ｙ０と名称を付し、４ｍごとに西から東へＸ０、Ｘ１…、北から南へＹ０、Ｙ１…と設定してある。
3．等高線や断面図中における水準値は、海抜標高を示す。
4．遺構図の縮尺は、随時図中にスケールを付してある。
5．挿図中に使用されているトーンについては、随時図中に注釈を付してある。
6．遺構の略称は次のとおりである。

Ｗ：溝跡　　Ｄ：土坑

7．遺構埋没土等の色調観察は『新版　標準土色帖』（農林水産技術会議事務局　財団法人日本色彩研究所監修 2006）に従っている。

目　　次

はじめに
例言・凡例
目次・図版目次・表目次・写真図版目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……2
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　調査方針と経過……6
　1　調査の方針……6
　2　調査の経過……7
Ⅳ　基本土層……7
Ⅴ　遺構……8
　1　遺跡の概要……8
　2　1区……10
　3　2区……11
　4　3区……11
　5　4区……12
Ⅵ　まとめ……21
自然科学分析……22
写真図版
抄録・奥付

図版目次

Fig. 1　五代東田遺跡調査区域図 ……1
Fig. 2　五代東田遺跡位置図 ……2
Fig. 3　周辺遺跡図 ……4
Fig. 4　基本土層 ……8
Fig. 5　五代東田遺跡全体図 ……9
Fig. 6　1区全体図 ……14
Fig. 7　1区断面図 ……15
Fig. 8　2区全体図 ……16
Fig. 9　2区断面図（1）……16
Fig. 10　2区断面図（2）……17
Fig. 11　3区全体図 ……18
Fig. 12　4区全体図 ……19
Fig. 13　3区断面図 ……20
Fig. 14　4区断面図 ……20
Fig. 15　谷底平野の水田利用模式図 ……21

表目次

Tab. 1　周辺遺跡一覧表（1）……5
Tab. 2　周辺遺跡一覧表（2）……6
Tab. 3　1区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表 ……10
Tab. 4　2区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表 ……11
Tab. 5　3区Ａｓ－Ｂ下・Ｂ混水田区画計測表 …12
Tab. 6　4区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表（1）……13
Tab. 7　4区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表（2）……14

写真図版目次

ＰＬ．1
調査区と赤城山
五代東田遺跡全景
ＰＬ．2
1区全景
1区全景
1区3号畦畔全景
1区基本層序
1区1号用水路断面
1区1号用水路Ａｓ－ＫＫ拡大
ＰＬ．3
2区全景
2区全景
2区2号畦畔
2区1号用水路及び
1号畦畔断面
2区Ａｓ－Ｂ下水田跡工具痕
検出状況
ＰＬ．4
3区全景
3区全景
3区3号畦畔全景
3区Ｄ－1完掘状況
3区基本層序
ＰＬ．5
4区全景
4区全景
4区1号溝検出状況
4区1号水口
4区5号畦畔及び5号溝断面
ＰＬ．6
表土除去状況
簡易トイレ設置状況
プレハブ設置状況
作業風景
作業風景
測量風景
空撮風景
プラント・オパール調査風景

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 27 年６月、市産業政策課、市区画整理課と五代南部工業団地（拡張）に伴う土地区画整理事業にあたり、埋蔵文化財の取り扱いについて協議をおこない、事業区域内での試掘調査実施の運びとなった。

平成 28 年２月 26 日付けで前橋市長　山　本　　龍（区画整理課）より、試掘調査依頼が提出された。試掘調査の結果、部分的ではあるが平安時代の水田跡等を検出した。造成工事計画では遺構の保存が図れないため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向け調整を開始した。

平成 28 年４月 21 日付けで前橋市長　山　本　　龍（区画整理課）より埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に発掘調査を実施中であり、市教委直営による発掘調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。平成 28 年５月 17 日付けで前橋市と民間調査組織である有限会社毛野考古学研究所との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「五代東田遺跡」（遺跡コード：28C48）の「五代」は町名、「東田」は旧小字名を採用した。

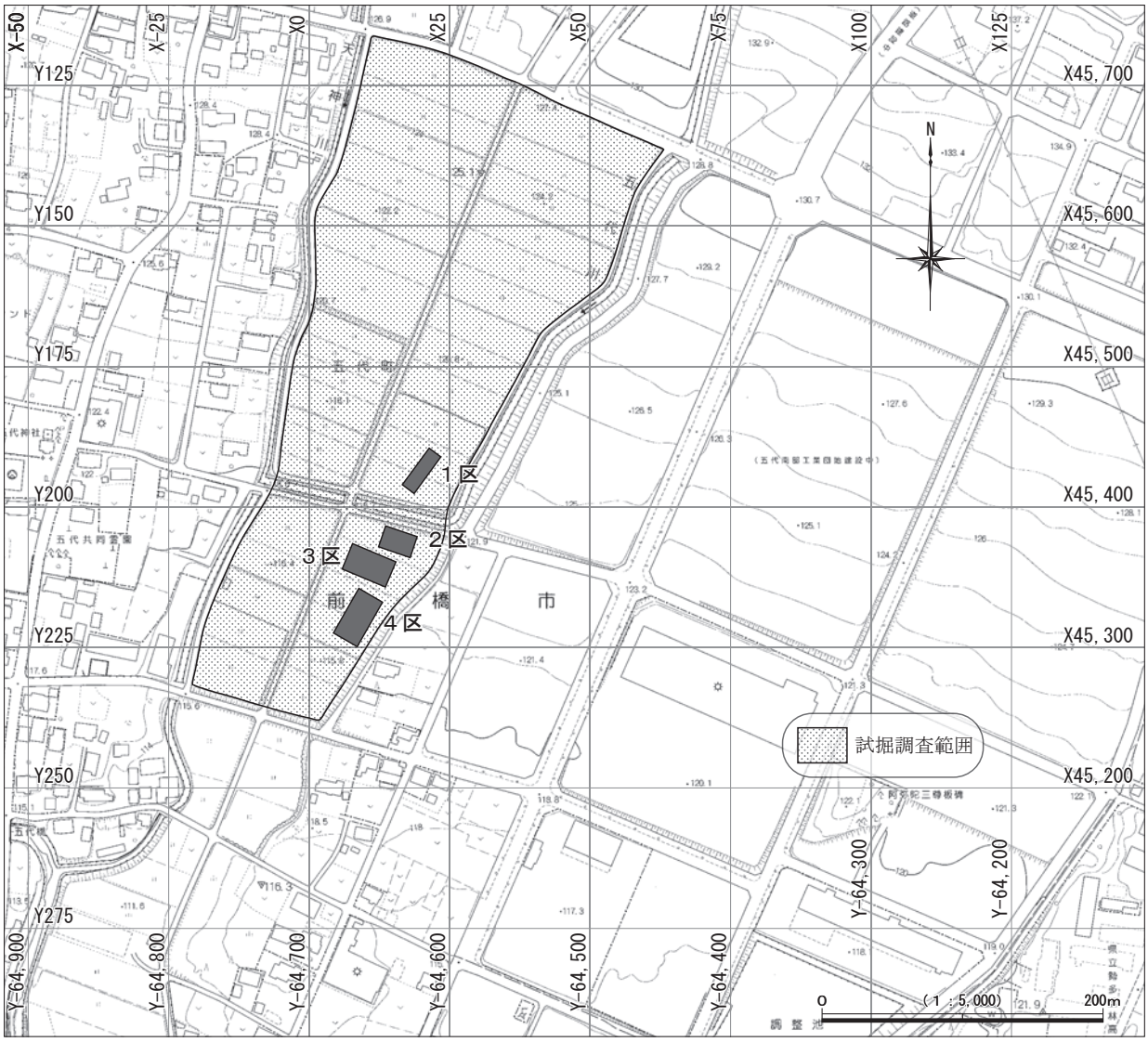


Fig. 1　五代東田遺跡調査区域図（前橋市役所発行『前橋市現形図』1/2,500 を 50%縮小）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

五代東田遺跡は、前橋市の中心部から北東へ約５㎞にある五代南部工業団地内に位置する。この五代南部工業団地の北端は、一般国道 17 号バイパス（上武道路）に接しており、近年において本地域は流通の拠点としても注目を集めている。本工業団地から周囲を概観すると北には雄大な裾野を持つ赤城山、北西に榛名山･小野子山･子持山、西に浅間山･妙義山、南に前橋台地（関東平野）、東に大間々扇状地･足尾山地を眺望することができる。なお、本遺跡はこれら景観のうち、赤城山南麓の末端付近に立地することになる。

赤城山は複式成層火山で、裾野は火山麓扇状地・岩なだれ堆積面・火砕流堆積面から形成されており、そこに中腹付近に源を持つ藤沢川・薬師川・寺沢川などの小河川が放射状に流路を取る。そして小河川は、幾重もの谷底平野を作り出している。本遺跡近辺は、山裾を形成する地形のうち火山麓扇状地・火砕流堆積面・谷底平野で構成されており、概ね南流する藤沢川を境として西側が約２万年前に形成された赤城白川の扇状地、東側が 7.5 万年前に形成された大胡火砕流堆積面とされている。なお、谷底平野はこれら赤城白川の扇状地・大胡火砕流堆積面が小河川により浸食されたことにより形成されたものである。さらに、南へ目を向けると山麓を南流する小河川を集める桃ノ木川が南東流しており、両岸に広瀬川低地帯を発達させている。この低地帯は幅１㎞程の間隔を保っており、これより南は約２万年前の前橋泥流堆積物で形成された前橋台地（関東平野）へと地形区分が変わるとされている。

これら様々な地形的な様相が見られる中で、本遺跡は大胡火砕流堆積面が小河川で浸食された谷底平野に立地していることになる。河川による浸食を逃れた舌状に延びる台地上では、縄文時代の集落が数多く確認されているが、奈良・平安時代の集落も多い。現時点において舌状台地上での調査は多く行われているが、谷底平野の調査は少ない。今回の調査は谷底平野の土地活用を知る上で重要な事例となり得ると言えよう。

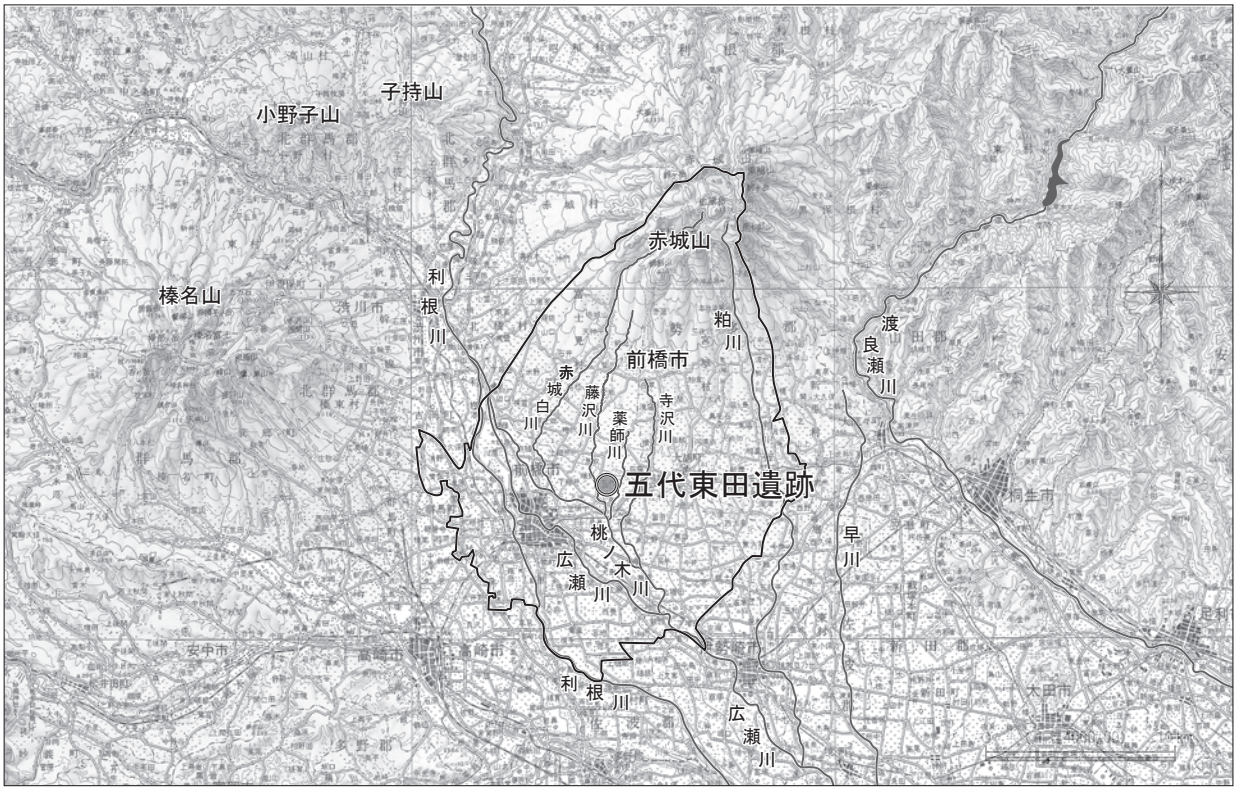


Fig. 2　五代東田遺跡位置図（国土地理院発行『宇都宮』･『長野』1/200,000 を 50％縮小）

2　歴史的環境

五代東田遺跡が位置する五代南部工業団地は長年にわたり発掘調査が行われ、縄文時代から奈良・平安時代まで多数の遺跡が確認された。ここでは縄文時代から奈良・平安時代まで簡略に述べる。

旧石器・縄文時代

赤城山南麓地域では多数の旧石器が確認されている。しかし、五代町周辺では数少なく、鳥取福蔵寺遺跡で細石器が数点確認されたのみである。石器は縄文時代草創期でもみられ、堤遺跡（32）では石器が多数確認された。石器群に伴う遺構は見当たらなかったが、五代町及び周辺地域では縄文草創期の遺構が確認された事例はない。その他に、縄文時代前期は花積下層式から諸磯ｃ式まで幅広く見られた。花積下層式は堤遺跡（32）、芳賀東部団地遺跡（29）で住居に伴って確認された。芳賀東部団地遺跡は花積下層だけではなく、縄文時代後期までの住居及び土坑も見られた。住居に関しては時期別にまとまっている傾向がみられ、集落の存在も窺える。その他、芳賀北原遺跡（43）では黒浜式がみられ、五代中原Ⅰ遺跡（11）では諸磯ｂ・ｃ式が確認できた。以上のことから五代町及び周辺地域では縄文前期でも黒浜式や諸磯ｂ・ｃ式に集中していると考えられる。

縄文時代中期は五領ヶ台式や阿玉台式･勝坂式が多く見られない一方、加曽利Ｅ式に集中する傾向がみられる。五代竹花遺跡（5）、五代伊勢宮遺跡（1）（23）、上泉新田塚遺跡（36）で加曽利Ｅ式が見られ、小神明遺跡群Ⅰ（31）では縄文前期の関山式が及び加曽利Ｅ式の住居が確認できた。阿玉台・勝坂式は本遺跡の東に位置する五代伊勢宮Ⅳ遺跡から住居跡や土坑が見られたが、五代町ではその他に確認できていない。また、五代深掘遺跡 No.２（6）では多数の縄文時代中期の土坑が確認され、中では千葉、長野、東北の特徴を持つ土器も確認できた。本遺跡周辺では主に前期の関山式、黒浜式、諸磯ｂ式の住居跡や土坑が確認され、中期は加曽利Ｅ式が多く見られた。

縄文時代後期は称名寺式や堀之内式、加曽利Ｂ1 式などが見られたが、前期や中期よりは少ない印象を受ける。また、晩期はほとんど見られないが、西新井遺跡第４地点（53）で安行 3a・3b 式の土器片が多数確認され、遮光器土偶片も見られた。また、弥生時代は湯気遺跡（46）、倉本遺跡（48）でしか確認できていないため、今後は赤城山南麓における縄文時代晩期から弥生時代までの状況について考える必要がある。

縄文時代の遺跡は多くが台地に位置している。中でも本遺跡の東側は中期中葉の住居跡や土坑が多く見られることから、本遺跡の台地面で縄文中期中葉の村が形成されていたと考えられる。

古墳時代

古墳時代は前期から終末期まで住居跡や古墳が確認された。古墳時代前期の遺構が確認された遺跡は五代伊勢宮Ⅶ遺跡（25）、五代江戸屋敷遺跡（2）がある。五代江戸屋敷遺跡は住居跡及び周溝墓が確認されたが、住居跡は遺物が確認できなかったため、住居形態から古墳時代前期と判断された。五代伊勢宮Ⅶ遺跡はまだ報告書が未刊行だが、古墳時代前期の住居跡及び、周溝墓が確認できた。五代江戸屋敷遺跡と五代伊勢宮Ⅶ遺跡は現道を挟んで周溝墓が調査されている。遺物としては土器片が数点確認された。その他、古墳前期は確認できていない。

古墳時代中期は本遺跡の東側では五代伊勢宮Ⅱ遺跡（8）１例しか確認できていない。しかし、本遺跡の北側に当たる五代中原Ⅱ遺跡（15）、五代中原Ⅲ遺跡（16）からカマドを持たない古墳時代中期の住居跡が多く確認された。五代中原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は本遺跡と違って台地に当たり、その南側で谷底平野が広がる。6 世紀初頭以前の水田が確認された本遺跡と同時期の可能性が高い。直接関係性はこれからの課題である。

住居跡は本遺跡の北側でしか見られなかったが、横穴式石室導入以前の５世紀後半から６世紀初頭の古墳群が芳賀西部団地遺跡（30）で確認された。芳賀西部団地遺跡（30）は本遺跡と若干距離があるが、赤城山南麓の貴重な古墳時代中期の資料と考えられる。

古墳時代後期の遺構は住居跡が多数示し、中でも 6 世紀の遺構が最も多く確認された。6 世紀の住居跡は本遺跡の東側に位置する遺跡のほとんどから確認されている。五代江戸屋敷遺跡（2）、五代伊勢宮Ⅴ遺跡（13）は 6 世紀初頭から後半まで広く見られた。また、上泉新田塚遺跡では 7 世紀中頃の住居跡とともに新田塚古墳の周溝が確認できた。五代町の北部では住居跡だけではなく、多数の古墳時代後期の古墳も調査されている。芳賀西部団地遺跡（30）では 5 世紀後半から 6 世紀初頭の古墳が 32 基（航空写真判読の結果、存在が確認されたものを含む）確認された。また、大日塚古墳（54）、オブ塚古墳（56）、オブ塚西古墳（57）など 6 世紀後半から 7 世紀の

Fig. 3　周辺遺跡図（国土地理院発行『前橋』・『大胡』・『鼻毛石』・『渋川』1/25,000 に加筆）

横穴式石室を持つ古墳が存在する。

古墳時代は後期の住居跡や古墳の調査が多く行われ、古墳時代前期･中期よりその実相が明らかになっている。一方、赤城山南麓の古墳前期･中期の様相は確認事例が少ないことから、まだ明らかになっていないと言えよう。5 世紀末から 6 世紀の古墳群が赤城山南麓に造墓されることや 6 世紀以降の住居が増えていくことの関係など五代町及び周辺地域でまだ多くの課題を残している。

奈良・平安時代以降

古墳時代以降からＡｓ－Ｂ降下以前の間はほとんどの遺跡で奈良･平安時代の遺構を確認している。特に奈良･平安時代の遺構は住居跡だけではなく、井戸跡や溝跡などが多く調査された。芳賀東部団地遺跡（29）及び芳賀北部団地遺跡（28）では奈良・平安時代の鍛冶関連遺構が確認され、当時の生活だけではなく、生産状況も復元することができた。また、桧峯遺跡（42）では奈良三彩の小壺が住居の中で確認された。その他、五代砂留遺跡群では 9 世紀から 10 世紀の住居跡・掘立柱建物・溝跡・道路状遺構まで見られた。

五代町及び周辺地域では 8 世紀から 10 世紀まで多数の住居跡が確認できている。しかし、今までは住居跡や掘立柱建物などのを主体とする集落の調査が大半を占めし、水田跡のような生産遺跡の調査が少なかった。鳥取松合下遺跡（33）では浅間山の 1108 年噴火（Ａｓ－Ｂ降下）以降の溝が確認された。溝の方位や重複関係、鉄分沈着層などから水田と判断された。

その他に奈良・平安時代以降の生産遺構は確認できていない。これは従来の調査が火砕流堆積面にあたる台地上で行われていたことに起因する。今後は谷底平野を調査することで五代町及び周辺地域の生産活動について明らかになることを期待する。

番号	遺跡名	時代等	参考文献
1	五代東田遺跡	古墳・平安水田	本報告書
2	五代江戸屋敷遺跡	古墳前期住居跡・方形周溝墓、古墳後期・奈良・平安時代住居跡	市埋文団 2000『五代江戸屋敷遺跡』
3	五代木福Ⅰ遺跡	縄文時代配石遺構･住居跡､古墳後期住居跡､奈良･平安時代掘立柱建物跡。中･近世溝･ピット	市埋文団 2000『五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡』
4	五代木福Ⅱ遺跡	古墳後期・奈良・平安住居跡	市埋文団 2001『五代木福Ⅱ遺跡・五代深堀Ⅰ遺跡』
5	五代竹花遺跡	縄文中期後葉・古墳後期～平安住居跡	市埋文団 2000『五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡』
6	五代深堀Ⅰ遺跡	縄文中期中葉住居跡・土坑・ピット群、奈良・平安住居跡	市埋文団 2001『五代木福Ⅱ遺跡・五代深堀Ⅰ遺跡』
7	五代伊勢宮Ⅰ遺跡	古墳～平安住居跡	市埋文団 2000『五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡』
8	五代伊勢宮Ⅱ遺跡	古墳後期～平安住居跡	市埋文団 2001『五代伊勢宮Ⅱ遺跡』
9	五代伊勢宮Ⅲ遺跡	平安住居跡・掘立柱建物跡・溝・井戸・地下式土坑、近世道路跡	市埋文団 2001『五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡』
10	五代深堀Ⅱ遺跡	縄文中期・古墳後期～平安住居跡	市埋文団 2001『五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡』
11	五代中原Ⅰ遺跡	縄文前期後葉・古墳中期～平安住居跡	市埋文団 2001『五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡』
12	五代伊勢宮Ⅳ遺跡	縄文中期中葉住居跡・土坑、平安住居跡	市埋文団 2001『五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡』
13	五代伊勢宮Ⅴ遺跡	縄文中期の住居跡・土坑、古墳後期～平安住居跡	市埋文団 2002『五代伊勢宮Ⅴ遺跡』
14	五代伊勢宮Ⅵ遺跡	縄文中期住居跡	市埋文団 2002『五代伊勢宮Ⅵ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡』
15	五代中原Ⅱ遺跡	古墳前期～中期（竈導入以前）住居跡	市埋文団 2002『五代伊勢宮Ⅵ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡』
16	五代中原Ⅲ遺跡	古墳前期～中期（竈導入以前）住居跡	市埋文団 2003『五代中原Ⅲ遺跡・五代山街道Ⅰ遺跡・五代山街道Ⅱ遺跡』
17	五代山街道Ⅰ遺跡	縄文前期～中期・奈良・平安住居跡	市埋文団 2003『五代中原Ⅲ遺跡・五代山街道Ⅰ遺跡・五代山街道Ⅱ遺跡』
18	五代山街道Ⅱ遺跡	縄文中期土坑、奈良・平安住居跡	市埋文団 2003『五代中原Ⅲ遺跡・五代山街道Ⅰ遺跡・五代山街道Ⅱ遺跡』
19	五代竹花Ⅱ遺跡	縄文中期中葉住居跡・土坑、古墳後期～平安住居跡、奈良・平安竪穴状遺構・地下式土坑	市埋文団 2003『五代竹花Ⅱ遺跡・五代木福Ⅲ遺跡』
20	五代木福Ⅲ遺跡	古墳後期～平安住居跡・掘立柱建物跡・溝・井戸跡	市埋文団 2003『五代竹花Ⅱ遺跡・五代木福Ⅲ遺跡』
21	五代木福Ⅳ遺跡	古墳後期～平安住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡、中世溝	市埋文団 2005『五代木福Ⅳ遺跡・五代深堀Ⅲ遺跡』
22	五代深堀Ⅲ遺跡	縄文中期中葉住居跡・土坑・溝、奈良・平安住居跡	市埋文団 2005『五代木福Ⅳ遺跡・五代深堀Ⅲ遺跡』
23	五代伊勢宮遺跡（1）	縄文中期後葉・古墳後期～平安住居跡、中世溝、近世道路遺構	市埋文団 2007『五代伊勢宮遺跡（1）』
24	五代伊勢宮遺跡（2）	縄文前期～中期土坑、平安住居跡	市埋文団 2009『五代伊勢宮遺跡（2）』
25	五代伊勢宮遺跡Ⅶ	縄文中期土坑、古墳前期住居跡・方形周溝墓、古墳後期住居跡・掘立柱建物跡、平安住居跡	2017 年度刊行予定
26	川白田遺跡	縄文前期中葉・後葉住居跡、縄文前期初頭～前葉・晩期土坑	山武考古学研究所 1998『川白田遺跡』
27	芳賀北曲輪遺跡	縄文前期後葉～後期初頭住居跡、終末期古墳	市埋文団 1990『芳賀北曲輪遺跡』
28	芳賀北部団地遺跡	奈良・平安住居跡・掘立柱建物跡・製鉄址・井戸跡・溝	市埋文団 1994『芳賀北部団地遺跡』

※市埋文団：前橋市埋蔵文化財発掘調査団　群埋文：（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　市教委：前橋市教育委員会

Tab. 1　周辺遺跡一覧表（1）

番号	遺跡名	時代等	参考文献
29	芳賀東部団地遺跡	縄文前期･中期後葉･後期初頭～前葉住居跡･土坑、古墳前期･中期住居跡、後期古墳、奈良・平安住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶遺構	市埋文団 1984『芳賀東部団地遺跡』 市埋文団 1990『芳賀東部団地遺跡群Ⅲ』
30	芳賀西部団地遺跡	５世紀後半～６世紀初頭古墳群、中世地下式土坑・井戸跡	市埋文団 1991『芳賀西部団地遺跡』
31	小神明遺跡群Ⅰ	縄文前期前葉・中期後葉住居跡・ピット群、平安住居跡、近世土坑・井戸跡・ピット群	市教委 1983『小神明遺跡群』
32	堤遺跡	縄文草創期石器群、縄文後期・平安住居跡、中世溝、竪穴状遺構	群埋文 2013『堤遺跡』
33	鳥取松合下遺跡・胴城遺跡	古墳後期～平安住居跡、As-B 以降の溝。※溝の方位や重複関係・鉄分沈着層から As-B 混土の水田と想定される	群埋文 2012『鳥取松合下遺跡・胴城遺跡』
34	五代砂留遺跡群	縄文前期後葉・後期前葉土坑、縄文後期中葉・古墳前期住居跡、平安住居跡・掘立柱建物跡・溝・道路状遺構	群埋文 2012『五代砂留遺跡群』
35	上泉武田遺跡	古墳後期～平安住居跡、中世溝	群埋文 2012『上泉武田遺跡』
36	上泉新田塚遺跡	縄文前期前葉～後葉・中期後葉住居跡・土坑、古墳後期住居跡、終末期古墳、奈良・平安住居跡・道跡	群埋文 2011『上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群』
37	荻窪東爪遺跡	縄文前期中葉住居跡	市埋文団 2001『荻窪鰯塚遺跡・荻窪東爪遺跡』
38	荻窪鰯塚遺跡	古墳後期～平安住居跡・掘立柱建物跡	市埋文団 2001『荻窪鰯塚遺跡・荻窪東爪遺跡』
39	荻窪倉兼Ⅱ遺跡	奈良・平安住居跡・掘立柱建物跡	市埋文団 2002『荻窪倉兼遺跡・荻窪倉兼Ⅱ遺跡』
40	荻窪倉兼遺跡	奈良・平安住居跡・掘立柱建物跡	市埋文団 2002『荻窪倉兼遺跡・荻窪倉兼Ⅱ遺跡』
41	五代桧峯Ⅱ遺跡	古墳後期住居跡	市埋文団 1997『五代桧峯Ⅱ遺跡』
42	桧峯遺跡	古墳後期～平安住居跡　※住居跡から奈良三彩小壺出土	市教委 1983『桧峯遺跡』
43	芳賀北原遺跡	縄文前期後葉・中期後葉～後期初頭住居跡、終末期古墳	市埋文団 1992『芳賀北原遺跡』
44	大神明遺跡	古墳後期住居跡	市教委 1984『小神明遺跡群Ⅱ』
45	端気遺跡群Ⅰ・Ⅱ	古墳後期住居跡、中世環濠・敷石遺構	市教委 1983『端気遺跡群Ⅰ』 市教委 1984『端気遺跡群Ⅱ』
46	湯気遺跡	弥生・古墳中期末～後期住居跡	市教委 1986『小神明遺跡群Ⅳ』
47	九料遺跡	縄文後期・古墳後期住居跡、平安溝	市教委 1984『小神明遺跡群Ⅱ』
48	倉本遺跡	弥生中期～後期住居跡、近世環濠・溝・ピット	市教委 1984『小神明遺跡群Ⅱ』
49	西田遺跡	縄文前期前葉・古墳中期住居跡、後期古墳、	市教委 1984『小神明遺跡群Ⅱ』
50	鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡	縄文中期～後期・古墳後期～平安住居跡	市埋文団 1998『鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡』
51	鳥取福蔵寺遺跡	旧石器、縄文前期・古墳後期～平安住居跡	市埋文団 1997『鳥福蔵寺遺跡』
52	鳥取東原遺跡	古墳中期末～後期住居跡・土坑	市埋文団 1997『鳥取東原遺跡』
53	西新井遺跡第４地点	縄文後期中葉・晩期前葉包含層	市教委 2014『西新井遺跡　第４地点』
54	大日塚古墳	６世紀後半横穴式石室古墳（渦文鏡・大刀・馬具等出土）	市史編さん委 1971『前橋市史』
55	東公田古墳	時期不明（円墳と考えられる）	群馬県教育委員会 1982『川曲遺跡　東公田古墳』
56	オブ塚古墳	６世紀後半横穴式石室前方後円墳（埴輪・玉纏大刀等出土）	市史編さん委 1971『前橋市史』
57	オブ塚西古墳	６世紀中葉と想定	市史編さん委 1971『前橋市史』
58	新田塚古墳	７世紀中葉横穴式石室円墳と想定	群馬県 1933『上毛古墳綜覧』 群埋文 2011『上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群』
59	桧峯古墳	７世紀横穴式石室円墳（玉類・耳環出土、桂萱 29 号墳）	市史編さん委 1971『前橋市史』
60	鳥取城跡	戦国期城郭	山崎一 1971『群馬県古城塁址の研究』上巻
61	勝沢城跡	戦国期城郭	山崎一 1971『群馬県古城塁址の研究』上巻
62	小坂子城跡	戦国期城郭	山崎一 1971『群馬県古城塁址の研究』上巻
63	川白田の砦	戦国期城郭	山崎一 1971『群馬県古城塁址の研究』上巻

※市埋文団：前橋市埋蔵文化財発掘調査団　　群埋文：(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　　市教委：前橋市教育委員会

Tab. ２　周辺遺跡一覧表（２）

Ⅲ　調査方針と経過

１　調査の方針

五代南部工業団地（拡張）土地区画整理事業は 93,000 ㎡の開発面積を有し、今回行われた本調査に先立って試掘調査が行われている。試掘調査の結果、本開発地内には部分的にＡｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石：1108 年降下）直下に水田跡の痕跡が認められたため、同水田跡の残存が認められる部分に対し、１～４区と名称を付して、本調査を行うこととなった。

重機による表土除去は２区→３区→４区→１区の順に行い、Ａｓ－Ｂ上面までの掘削とした。また、土地改良等で対象となるＡｓ－Ｂ下水田跡が壊されている部分も見られたことから、同部分に関しては、トレンチ状に深掘りを行い､下位に堆積する土壌の様相を捉えることに努めた。水田面の検出は基本的にジョレンを用いて行い、畦畔部分に関しては、移植ゴテを使用した。また、畦畔に囲われた各水田面ごとに２ｍ×２ｍの区画を設け、同部分に関しても移植ゴテを用いて微地形の検出を行い、Ａｓ－Ｂ降下時の水田面の風化や工具痕等の痕跡を捉えるようにした。検出された畦畔・用水路に対してはトレンチを設けて断ち割り調査を行い、構築過程・風化過程を記録している。なお､調査を進める段階で､Ａｓ－Ｂ下水田の耕作土中にＡｓ－Ｃ(浅間Ｃ軽石:３世紀末降下)・Ｈｒ－ＦＡ（榛名－二ッ岳渋川テフラ：６世紀初頭降下）の混入が見られたことから、Ａｓ－Ｂ下水田の調査後

に、同部分にトレンチを設けテフラ・プラントオパール分析を実施し、Ａｓ－Ｂ下水田以下での水田耕作の可能性を探る算段とした。

検出された遺構の測量は、各調査区周辺に基準杭を設置し、平面図をトータルステーション・断面図を方眼紙を用いた手実測で作成した。なお、平面図は 1/40・断面図は 1/20 の縮尺を基本として作図した。

写真撮影は、35 ㎜白黒・35 ㎜カラーリバーサルフィルムと 1,500 万画素相当のデジタルカメラを使用し、完掘後にはドローン（PHANTOM 3 STANDARD）による調査区の空中写真撮影を行った。

報告書作成作業における遺物トレース・写真加工・版組等は Adobe IllustratorCS2・Adobe PhotoshopCS2・Adobe InDesignCS2 を使用して行った。

２　調査の経過

現地での発掘調査は平成 28 年５月 17 日から同年７月 15 日まで、報告書作成は、平成 28 年７月 18 日から平成 29 年３月 24 日の間で実施した。

【発掘調査】平成 28 年５月 17 日：調査準備に着手。**５月 31 日**：発掘器材の搬入。調査区の設定。**６月１日**：駐車場用地の整地。**６月３日**：重機による２区の表土除去開始。簡易トイレの設置。**６月６日**：プレハブの搬入。**６月７日**：２区の表土除去終了を受け、３区の表土除去に移行。**６月 11 日**：ＧＰＳによる基準点設置。３区の表土除去終了。４区の表土除去に着手。**６月 14 日**：２区の遺構確認作業開始。**６月 15 日**：２区のＡｓ－Ｂ下水田跡検出作業開始。**６月 20 日**：４区の表土除去終了。１区の表土除去開始。３区のＡｓ－Ｂ下水田跡検出作業に着手。**６月 24 日**：１区の表土除去終了。**６月 28 日**：４区のＡｓ－Ｂ下水田跡検出作業開始。**７月６日**：２～４区の空撮。**７月７日**：１区のＡｓ－Ｂ下水田跡検出作業開始。**７月 11 日**：４区より埋め戻し開始。**７月 12 日**：１区の空撮。テフラ・プラントオパール分析の実施。３区埋め戻し開始。市教育委員会による現場終了確認。**７月 14 日**：２区の埋め戻し開始。**７月 15 日**：１区の埋め戻し開始および完了。現地調査終了。

【報告書作成】平成 28 年７月 18 日：図面修正。写真図版作成。**８月 12 日**：遺構原稿執筆。**10 月６日**：遺構トレース開始。**12 月 14 日**：版組。**平成 29 年２月 27 日**：入稿・校正。**３月 17 日**：印刷・製本。**３月 23 日**：返還準備。**３月 24 日**：報告書発行。

Ⅳ　基本土層

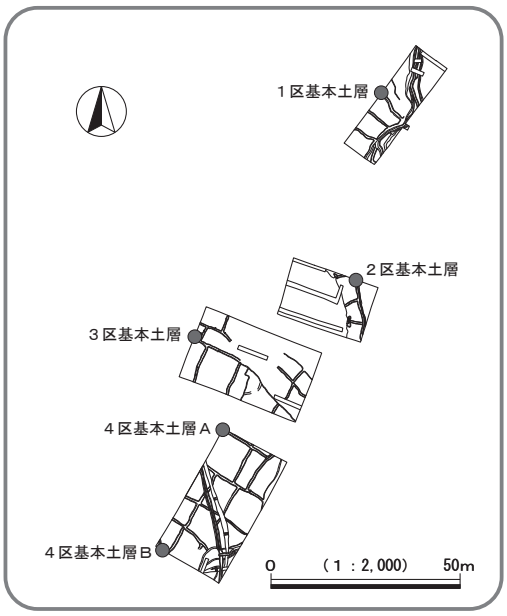
本遺跡は 7.5 万年前に形成された大胡火砕流堆積面が小河川により浸食された谷底平野に立地しており、北から南へ向けて下る傾斜地となっている。このため、１区の標高が高く、４区の標高が低いことになる。

遺構の検出は、Ａｓ－Ｂ層（**Ⅺ層**）直下にあたる水田面（**Ⅻ層**）を捉えることに主眼を置いた。Ⅻ層上面での標高値は１区で約 118.0ｍ、４区で約 115.5ｍで高低差は 2.5ｍを測る。**ⅩⅣ層**以下の基本土層に関しては、幾度にも及ぶ小河川の流路変更が存在しており、安定的な層位を捉えるに至らなかった。比較的新しい流路に関しては、Ａｓ－ＣやＨｒ－ＦＡの混入が顕著に見られた。

基本土層の詳細は以下の通りである。

Ⅰ層　黄褐色土：現水田土壌。**Ⅱ層**　黄褐色土：土地改良時の埋土。**Ⅲ層**　灰褐色土：土地改良以前の水田土壌。**Ⅳ層**　黄褐色土：Ａｓ－Ｂφ 0.2㎝微量含む。しまりあり。粘性やや弱。**Ⅴ層**　灰黄褐色土：Ａｓ－Ｂφ 0.2㎝中量含む。しまりあり。粘性ややあり。**Ⅵ層**　灰黄褐色土：Ａｓ－Ｂφ 0.2㎝中量含む。しまりあり。粘性やや

あり。鉄分の沈着が多く見られる。**Ⅷ層**　褐灰色土：Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量含む。しまりあり。粘性やや弱。鉄分の沈着が少量見られる。**Ⅷ層**　褐灰色土：Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量含む。しまりあり。粘性ややあり。鉄分の沈着が中量見られる。**Ⅸ層**　褐灰色土：Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量含む。しまりあり。粘性ややあり。鉄分の沈着が少量見られる。**Ⅹ層**　黒褐色土：Ａｓ－Ｂφ0.2㎝多量含む。しまりあり。粘性ややあり。鉄分の沈着が中量見られる。**ⅪａⅠ層**　赤褐色土：Ａｓ－Ｂ一次堆積火山灰層。しまりあり。粘性弱。**ⅪｂⅠ層**　灰黄褐色土：Ａｓ－Ｂ一次堆積軽石層。軽石の粒径0.2㎝。しまり弱。粘性なし。**ⅫⅠ層**　黒褐色土：Ａｓ－Ｃφ0.2～0.5㎝・Ｈｒ－ＦＡ軽石φ0.2㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。Ａｓ－Ｂ直下の水田土壌。鉄分の沈着が多量見られる。**ⅩⅢⅠ層**　黒色土：砂粒少量、Ａｓ－Ｃφ0.2㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。鉄分の沈着が多量見られる。**ⅩⅣⅠ層**　黒色土：Ａｓ－Ｃφ0.3㎝少量含む。しまりあり。粘性あり。



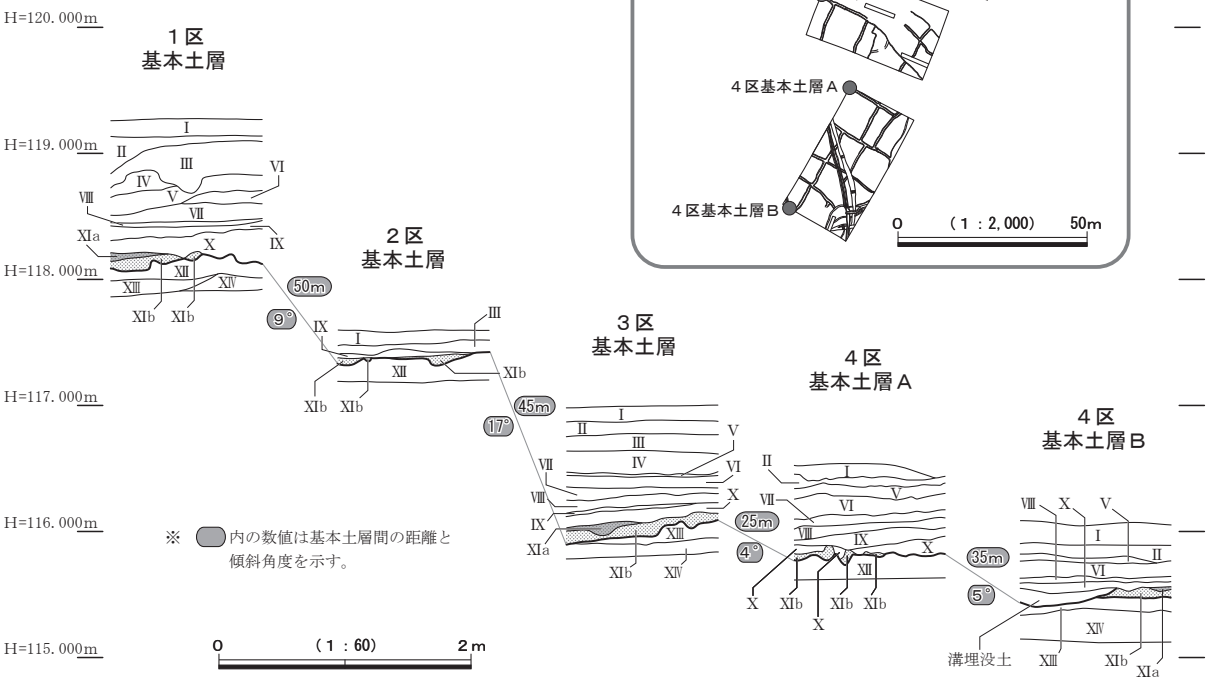


Fig. 4　基本土層

Ⅴ　遺構

1　遺跡の概要

今回の調査区は１区～４区に分かれており、北から南へ向けて１区…４区と名称を付してある。各調査区で主に確認できた遺構はＡｓ－Ｂ下水田跡が挙げられ、これに伴い畦畔・水口・用水路も確認されている。確認されたＡｓ－Ｂ下水田跡は本遺跡が立地する谷底平野全体に広がっていたものと推測される。しかしながら、２区西側のほとんどが戦後に行われた農地改良による撹拌を被る状況が示すように、同様な状態が本谷底平野に広がっていることが先に行われた試掘調査により明らかとなっている。また、現状の地形では台地と低地の変換点は調

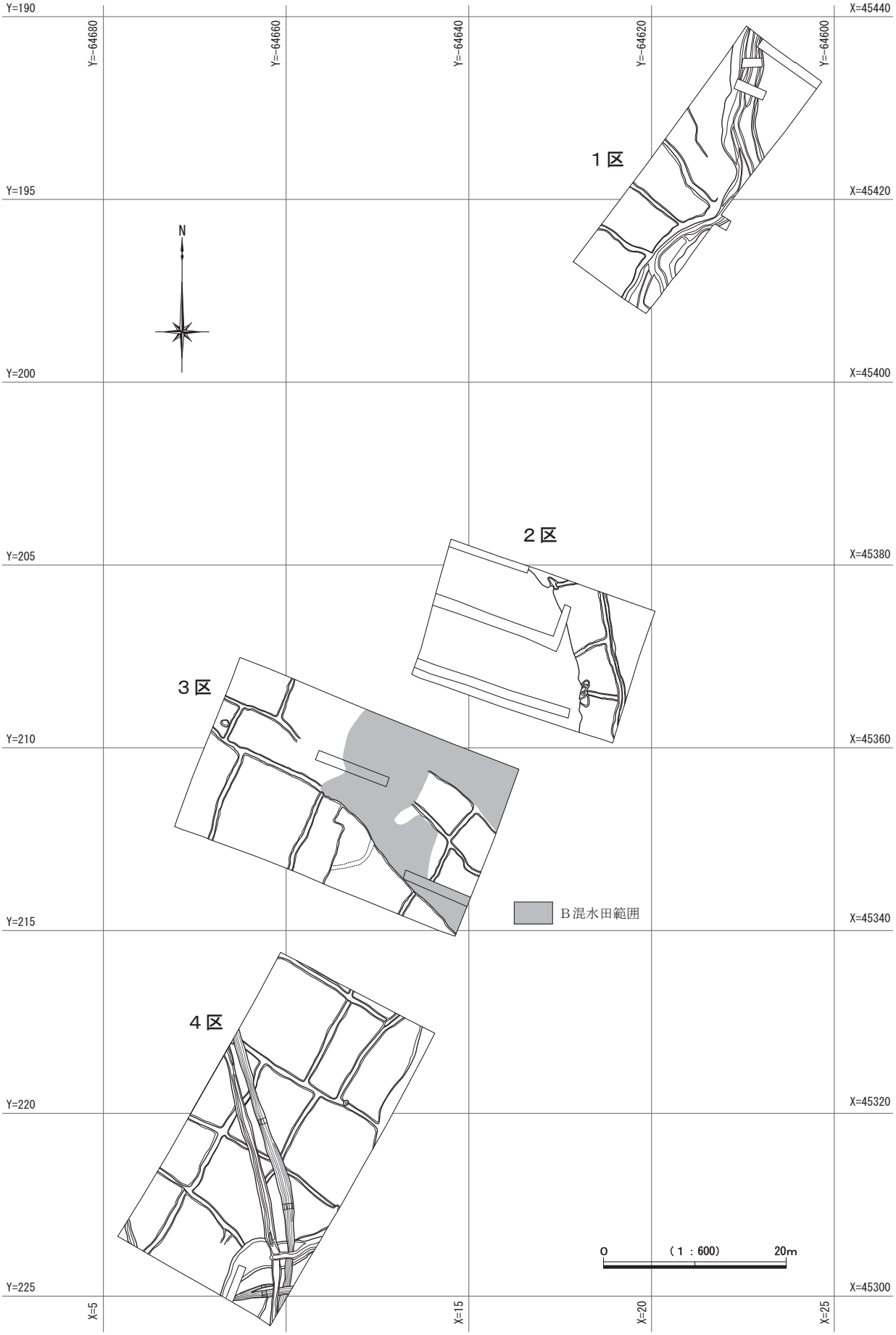


Fig. 5　五代東田遺跡全体図

査区からさらに東側で見られるが、１・２・４区東端のＡｓ－Ｂ直下では台地へ向かう傾斜地形がすでに表れている。おそらく、この状態も戦後の農地改良によるもので、元々は狭い谷をさらに東西に広げることにより生産量の増大を図ったのであろう。言い方を換えるとＡｓ－Ｂ直下での水田耕作は、現状の地形よりもさらに狭い範囲で行っていたことになる。ところで、水田耕作は地形的および社会的背景が大きく変わらない限り継続的に行われるものである。本遺跡では、３区東半でＡｓ－Ｂ混土の水田土壌がＡｓ－Ｂ直下の水田を浸食する状態が確認されているほか、基本土層を見ても鉄分の沈着層が確認できることから、現代に至るまで継続的に水田耕作が行われていたものと言えよう。さらに２区３号トレンチでの自然科学分析においては、Ｈｒ－ＦＡ一次堆積層直下の土壌から稲作の可能性を十分指摘できる量のプラント・オパールが検出されている。このため、本遺跡地では、概ね６世紀初頭から水田耕作が継続的に行われたものと想定できよう。

２　１区

Ａｓ－Ｂ下水田跡

残存状況：中央西端で厚さ 17 ㎝程のＡｓ－Ｂ一次堆積層が水田を覆っていた。１号用水路を境に西側へ展開している。１号用水路東側は台地へ向かう斜面地となる。**地形**：北東から南西へ傾斜する。水田面の最高位は 118.45 ｍ、最低位は 117.69 ｍを測る。**区画**：１号用水路に沿った縦畦１条、縦畦に接続ないし接続するものと想定される横畦４条により５つの区画に分かれる。**畦畔**：幅は縦畦が 31 ～ 124 ㎝、横畦が 43 ～ 96 ㎝を測る。南側への落差は大きいが、北側では顕著な落差は認められない。畦畔の頂部にはＡｓ－Ｂ一次堆積層最下位の火山灰は残存しておらず、Ａｓ－Ｂ混土で覆われていたため、耕作時の状態は留めていないものと考えられる。**水口**：本調査区においては確認できなかった。**水田面の状態**：なだらかであるが、２～ 10 ㎝程の凸凹が顕著に見られる。**遺物**：出土しなかった。

１号用水路

位置：検出されたＡｓ－Ｂ下水田跡の縦畔に接する部分に位置する。**形態**：南北・南西方向に蛇行しながら走行し、底面は南へ向かうにつれ低くなり、高低差は 74 ㎝を測る。南端の蛇行部分では、主流から南方向へ分岐するような浅い窪みが見られる。断面形状は浅い皿状を呈する。**計測値**：主軸方位は蛇行が顕著なため、計測不能。幅 1.11 ～ 3.18 ｍ。残存深度 0.67 ｍ。**埋没状態**：Ａｓ－Ｂ一次堆積層で埋没する。**遺物**：出土しなかった。**時期**：平安時代末期と想定される。

２号用水路

位置：１号用水路東に位置し、調査区北半のみの確認となっている。なお、北端付近は後世に構築されたものと想定する１号用水路により西側の立ち上がりは壊されている。**形態**：南北方向に緩やかに蛇行しながら走行し、底面は南へ向かうにつれ低くなり、高低差は 23 ㎝を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。**計測値**：主軸方位Ｎ－ 90°。幅 0.3 ～ 0.70 ｍ。残存深度 0.67 ｍ。**埋没状態**：砂粒による自然埋没でＡｓ－Ｂは含まれない。**遺物**：出土しなかった。**時期**：Ａｓ－Ｂ降下以前と想定される。

区画No.	面積（㎡）	長軸（m）	短軸（m）	田面中央標高（m）	田面比高（㎝）	縦畦高（㎝）	縦畦幅（㎝）	横畦高（㎝）	横畦幅（㎝）	備考
1	—	—	5.21	118.34	25	—	—	0	—	
2	—	—	3.86	118.22	19	6	61 ～ 81	3	71 ～ 96	
3	—	—	5.07	117.96	18	5	75 ～ 124	9	43 ～ 96	
4	—	—	4.90	117.86	19	2	31 ～ 70	8	44 ～ 75	
5	—	—	—	117.77	12	13	39 ～ 68	6	50 ～ 74	

Tab. ３　１区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表

３　２区

Ａｓ－Ｂ下水田跡

残存状況：残存部分の北端で厚さ６㎝程のＡｓ－Ｂ一次堆積層が水田を覆っていた。３号用水路を境に西側へ展開している。３号用水路東側は台地へ向かう斜面地となる。**地形**：北東から南西へ傾斜する。水田面の最高位は117.37ｍ、最低位は117.09ｍを測る。**区画**：３号用水路に沿った縦畦１条、縦畦に接続ないし接続するものと想定される横畦３条により４つの区画に分かれる。**畦畔**：幅は縦畦が37～64㎝、横畦が47～69㎝を測る。南側への落差は大きいが、北側では顕著な落差は認められない。畦畔の頂部にはＡｓ－Ｂ一次堆積層最下位の火山灰は残存しておらず、Ａｓ－Ｂ混土で覆われていたため、耕作時の状態は留めていないものと考えられる。**水口**：土坑状の窪みが２か所で見られるが、いずれも木根痕と判断した。**水田面の状態**：なだらかであるが、２～10㎝程の凸凹が顕著に見られる。**遺物**：出土しなかった。

１号用水路

位置：検出されたＡｓ－Ｂ下水田跡の縦畔に接する部分に位置する。**形態**：南北方向に蛇行しながら走行し、底面は南へ向かうにつれ低くなり、高低差は11㎝を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。**計測値**：主軸方位はＮ－10°－Ｗ。幅0.29～0.52ｍ。残存深度0.10ｍ。**埋没状態**：Ａｓ－Ｂ一次堆積層で埋没する。**遺物**：出土しなかった。**時期**：平安時代末期と想定される。

トレンチ

表土除去を行ったところ、調査区西側の大半が攪乱でＡｓ－Ｂ下水田跡が捉えられなかったことから、１～３号トレンチを設け、Ａｓ－Ｂ下水田跡のさらに下位を調査した。結果として、１・２号トレンチでは安定した土層の堆積を確認するに至ったが、３号トレンチでは少なくとも２条の流路が混在している状態が窺えた。なお、トレンチ調査であるため、この流路が自然流路または用水路であるかの判断を下すには至らなかった。これらの流路のうち、東端に位置する流路では、Ａｓ－Ｃの混入が見られ、埋没土上位にＨｒ－ＦＡの一次堆積層が確認できたため、Ａｓ－Ｃ降下からＨｒ－ＦＡ降下間に帰属する流路と捉えられる。また、同流路の埋没土に対し自然科学分析を行った結果、Ｈｒ－ＦＡ直下の土壌からイネのプラント・オパールが一定量確認されたため、当該期には水田耕作が行われていたものと判断された。なお、それ以下の土壌からは水田耕作を肯定できるだけの量のイネのプラント・オパールは検出されていない。

区画No.	面積（㎡）	長軸（ｍ）	短軸（ｍ）	田面中央標高（ｍ）	田面比高（㎝）	縦畦高（㎝）	縦畦幅（㎝）	横畦高（㎝）	横畦幅（㎝）	備考
6	—	—	—	117.30	5	—	—	4	—	
7	—	—	6.64	117.32	19	6	37～54	4	47～56	
8	—	—	5.20	117.20	12	9	39～63	5	52～68	
9	—	—	—	117.14	14	7	38～64	7	52～69	

Tab. ４　２区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表

４　３区

Ａｓ－Ｂ下水田跡

残存状況：残存部分の南端で厚さ17㎝程のＡｓ－Ｂ一次堆積層が水田を覆っていた。調査区北東はＢ混水田によりＡｓ－Ｂ下水田面が壊されている。**地形**：北東から南西へ傾斜する。水田面の最高位は116.71ｍ、最低位は115.82ｍを測る。**区画**：縦畦７条、横畦４条により15の区画に分かれる。**畦畔**：幅は縦畦が39～81㎝、横

畦が 40 ～ 78 ㎝を測る。南側および西側への落差は大きいが、北側では顕著な落差は認められない。畦畔の頂部にはＡｓ－Ｂ一次堆積層最下位の火山灰は残存しておらず、Ａｓ－Ｂ混土で覆われていたため、耕作時の状態は留めていないものと考えられる。**水口**：本調査区においては確認できなかった。**水田面の状態**：なだらかであるが、２～９㎝程の凸凹が顕著に見られる。**遺物**：出土しなかった。

Ａｓ－Ｂ混水田跡（Ａｓ－Ｂ降下以降の水田跡）

残存状況：調査区北東側でのみ確認できた。**地形**：北東から南西へ傾斜する。水田面の最高位は 116.71 ｍ、最低位は 116.03 ｍを測る。**区画**：明確な区画は確認できなかった。**疑似畦畔**：確認できなかった。**水口**：本調査区においては確認できなかった。**水田面の状態**：なだらかで２～５㎝程の凸凹が見られる。**遺物**：出土しなかった。**備考**：所謂、代掻きを行った水田土壌を除去した状態（水田の掘り方）を検出したことになる。代掻き土壌の上面を検出するＡｓ－Ｂ下水田跡とは捉える面が異なるものである。

Ｄ－１号土坑

位置：水田区画 13 内に位置する。**形態**：平面形態は不整楕円形状、断面形状は「Ｕ」字状を呈する。**計測値**：主軸方位はＮ－ 69° －Ｗ。平面 1.00 ～ 0.76 ｍ。残存深度 0.27 ｍ。**埋没状態**：Ａｓ－Ｂ・黒色粘質土が混入する暗灰色を主体とした土による自然埋没と想定される。**遺物**：出土しなかった。**時期**：Ａｓ－Ｂ降下以降と想定される。

区画No.	面積（㎡）	長軸（ｍ）	短軸（ｍ）	田面中央標高（ｍ）	田面比高（㎝）	縦畦高（㎝）	縦畦幅（㎝）	横畦高（㎝）	横畦幅（㎝）	備考
10	—	—	—	116.54	26	—	—	0	—	Ｂ混水田
11	—	—	—	116.21	13	2	45 ～ 68	0	62 ～ 77	
12	—	—	—	116.14	6	9	45 ～ 68	1	44 ～ 59	
13	—	—	3.69	116.03	5	1	49 ～ 63	3	44 ～ 64	Ｄ－１土重複
14	—	—	4.00	116.05	5	1	49 ～ 63	7	44 ～ 78	
15	—	—	3.97	116.42	13	6	55 ～ 66	3	48 ～ 72	
16	—	—	4.07	116.46	9	2	55 ～ 66	3	40 ～ 61	
17	—	—	6.18	116.27	16	3	46 ～ 56	8	48 ～ 72	
18	—	—	5.70	116.34	15	1	46 ～ 56	4	40 ～ 61	
19	—	—	—	116.21	11	0	54 ～ 73	7	—	
20	—	—	6.06	116.08	13	7	39 ～ 73	8	—	
21	14.78	5.95	4.49	116.12	10	0	39 ～ 54	4	—	
22	—	—	1.87 ～ 3.92	115.97	9	2	55 ～ 80	6	—	
23	—	—	9.16	115.91	12	3	53 ～ 81	8	60 ～ 78	
24	—	—	—	115.83	15	9	53 ～ 81	11	44 ～ 74	

Tab. ５　３区Ａｓ－Ｂ下・Ｂ混水田区画計測表

５　４区

Ａｓ－Ｂ下水田跡

残存状況：南西端で厚さ９㎝程のＡｓ－Ｂ一次堆積層が水田を覆っていた。調査区北東端および南東端は台地へ向かう斜面地となる。**地形**:北東から南西へ傾斜する。水田面の最高位は 116.05 ｍ、最低位は 115.44 ｍを測る。**区画**：縦畦５条、横畦４条により 15 の区画に分かれる。**畦畔**：幅は縦畦が 47 ～ 90 ㎝、横畦が 43 ～ 86 ㎝を測る。南側および西側への落差は大きいが、北側では顕著な落差は認められない。畦畔の頂部にはＡｓ－Ｂ一次堆積層最下位の火山灰は残存しておらず、Ａｓ－Ｂ混土で覆われていたため、耕作時の状態は留めていないものと考えられる。**水口**:区画 25 の南東端と区画 28 の北東端を結ぶ水口が１か所で確認されている。水口の幅は 0.45 ～ 0.53 ｍで、区画 25 から区画 28 への落差は６㎝を測る。**水田面の状態**：なだらかであるが、３～ 11 ㎝程の凸凹が顕著に見られる。**遺物**：出土しなかった。

Ｗ－１号溝

位置：区画 29 南西端から調査区南東端間に位置する。**重複**：Ａｓ－Ｂ下水田跡・Ｗ－３・４号溝と重複し、本遺構はＷ－３号溝より古く、Ａｓ－Ｂ下水田跡・Ｗ－４号溝より新しい。**形態**：南北方向に僅かに蛇行しながら走行し、底面は南へ向かうにつれ低くなり、トレンチ間の計測となるが高低差は 12 ㎝を測る。断面形状は薬研状を呈する。溝の両上端には一定の間隔で木杭が打たれていた。**計測値**：主軸方位はＮ－ 17° －Ｗ～Ｎ－７° －Ｅ。幅 0.54 ～ 1.43 m。残存深度 0.36 m。**埋没状態**：Ａｓ－Ｂが少量混ざる暗灰色土による人為埋没と想定される。**遺物**：近現代に帰属する磁器・陶器片が数点見られた。**時期**：近現代以降と想定される。

Ｗ－２号溝

位置：区画 32 北西端から調査区南東端間に位置する。**重複**：Ａｓ－Ｂ下水田跡・Ｗ－３・４号溝と重複し、本遺構は重複する全ての遺構より新しい。**形態**：南北方向に僅かに蛇行しながら走行し、底面は南へ向かうにつれ低くなり、高低差は 18 ㎝を測る。断面形状は皿状を呈するが、東側にテラスを有する。溝の両上端には一定の間隔で木杭が打たれていた。**計測値**：主軸方位はＮ－ 13° －Ｗ～Ｎ－２° －Ｅ。幅 0.58 ～ 1.22 m。残存深度 0.12 m。**埋没状態**：Ａｓ－Ｂが少量混ざる暗灰色土による人為埋没と想定される。**遺物**：近現代に帰属する磁器・陶器片が数点見られた。**時期**：近現代以降と想定される。

Ｗ－３号溝

位置：調査区南東端に位置する。**重複**：Ａｓ－Ｂ下水田跡・Ｗ－１・２号溝と重複し、本遺構はＡｓ－Ｂ下水田跡・Ｗ－１号溝より新しく、Ｗ－２号溝より古い。**形態**：東西方向に走行し、地形の状態から底面は西へ向かうにつれ低くなるものと推測される。断面形状は皿状を呈するが、南側にテラスを有する。**計測値**：主軸方位はＮ－ 83° －Ｅ。幅 0.45 ～ 0.84 m。残存深度 0.13 m。**埋没状態**：Ａｓ－Ｂが少量混ざる暗灰色土による人為埋没と想定される。**遺物**：出土しなかった。**時期**：埋没土の状態と重複関係から近現代以降と想定される。

Ｗ－４号溝

位置：調査区南東端に位置する。**重複**：Ｗ－１・２・３号溝と重複し、本遺構は重複する全ての遺構より古い。**形態**：南西方向に蛇行しながら走行し、底面は南西方向へ向かうにつれ低くなり、高低差は 11 ㎝を測る。断面形状は不整形であるが概ね皿状を呈する。**計測値**：主軸方位はＮ－ 82° －Ｅ～Ｎ－ 24° －Ｅ。幅 1.63 ～ 3.36 m。残存深度 0.27 m。**埋没状態**：自然埋没と想定される。埋没土中にＡｓ－Ｂ一次堆積層が見られる。**遺物**：出土しなかった。**時期**：Ａｓ－Ｂ降下時には多少の埋没が進んでいたものの、当該期の水田に伴う用水路と判断した。

Ｗ－４号溝

位置：調査区南西端の区画 39 に位置する。**重複**：Ａｓ－Ｂ下水田跡と重複し、本遺構はＡｓ－Ｂ下水田跡より新しい。**形態**：南北方向に走行し、残存部分に関しては高低差は見られない。断面形状は浅い皿状を呈する。**計測値**：主軸方位はＮ－ 12° －Ｗ。幅 0.58 ～ 0.78 m。残存深度 0.15 m。**埋没状態**：鉄分を含むＡｓ－Ｂ混土による自然埋没と想定される。**遺物**：出土しなかった。**時期**：Ａｓ－Ｂ降下以降と想定される。

区画No.	面積（㎡）	長軸（m）	短軸（m）	田面中央標高（m）	田面比高（cm）	縦畦高（cm）	縦畦幅（cm）	横畦高（cm）	横畦幅（cm）	備考
25	—	—	4.96	115.96	13	5	47 ～ 69	3	60 ～ 64	
26	—	—	—	115.88	4	8	52 ～ 57	6	60 ～ 74	
27	—	—	4.40	115.92	21	3	47 ～ 76	2	54 ～ 72	
28	39.03	10.06	3.88	115.86	9	5	47 ～ 90	5	53 ～ 86	

Tab. 6　４区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表（１）

区画No.	面積（㎡）	長軸（m）	短軸（m）	田面中央標高（m）	田面比高（cm）	縦畦高（cm）	縦畦幅（cm）	横畦高（cm）	横畦幅（cm）	備考
29	—	10.20	—	115.77	13	7	51 ～ 90	14	60 ～ 85	
30	72.90	9.48	7.69	115.80	20	4	53 ～ 73	8	43 ～ 73	
31	46.37	8.25	5.62	115.65	7	8	53 ～ 85	12	63 ～ 85	
32	—	8.90	—	115.61	1	1	62 ～ 85	6	62 ～ 80	
33	—	8.81	—	115.72	15	0	55 ～ 57	3	43 ～ 68	
34	45.24	7.32	6.18	115.63	9	8	55 ～ 82	7	52 ～ 79	
35	—	6.19	—	115.53	5	12	62 ～ 82	10	47 ～ 80	
36	—	—	—	115.51	6	12	—	—	—	
37	—	—	—	115.53	6	1	65 ～ 67	4	52 ～ 68	
38	—	—	5.59	115.54	11	2	60 ～ 88	7	62 ～ 79	
39	—	—	—	115.46	11	7	60 ～ 88	7 1	47 ～ 64	

Tab. 7　４区Ａｓ－Ｂ下水田区画計測表（２）

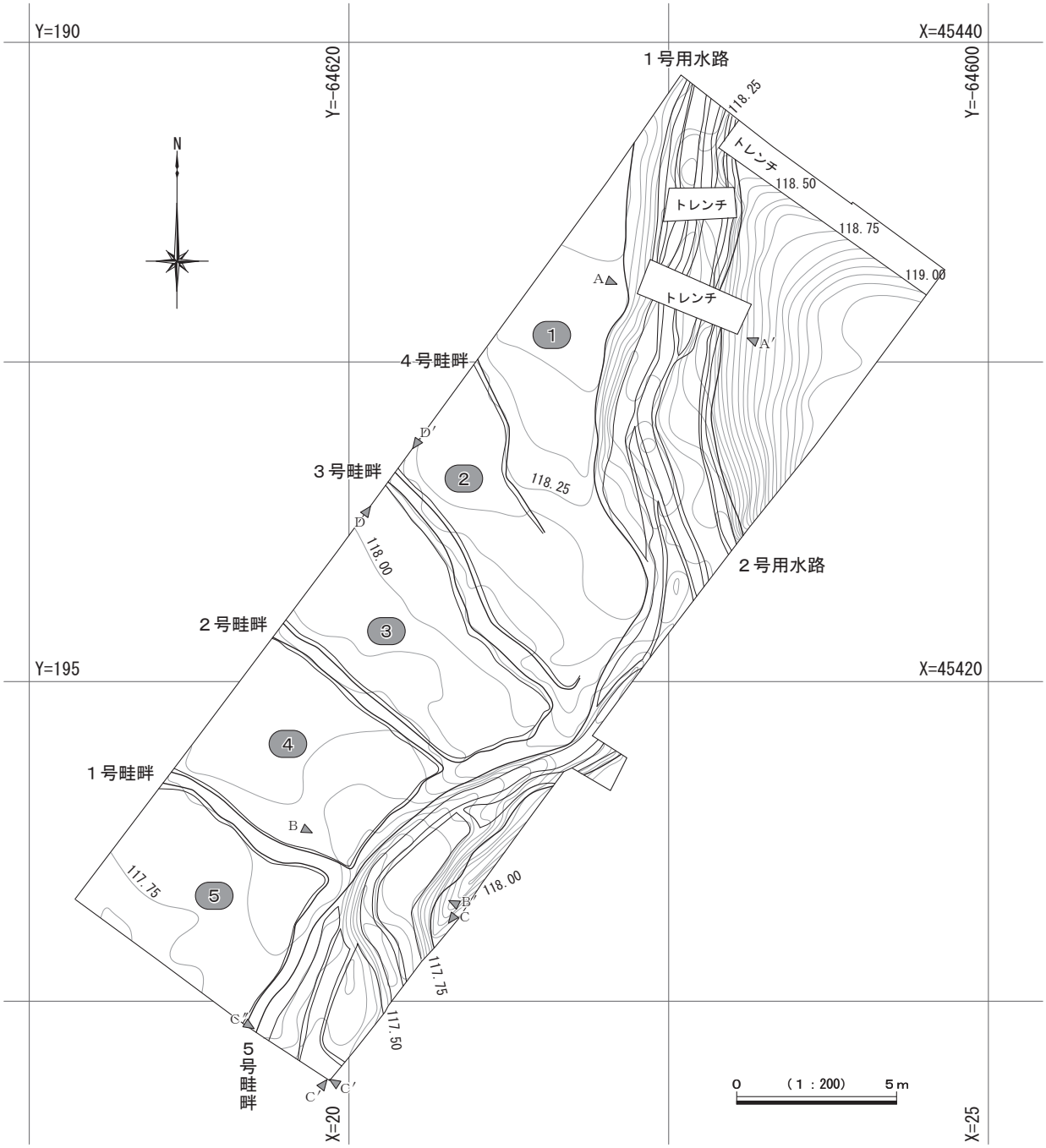


Fig. 6　１区全体図

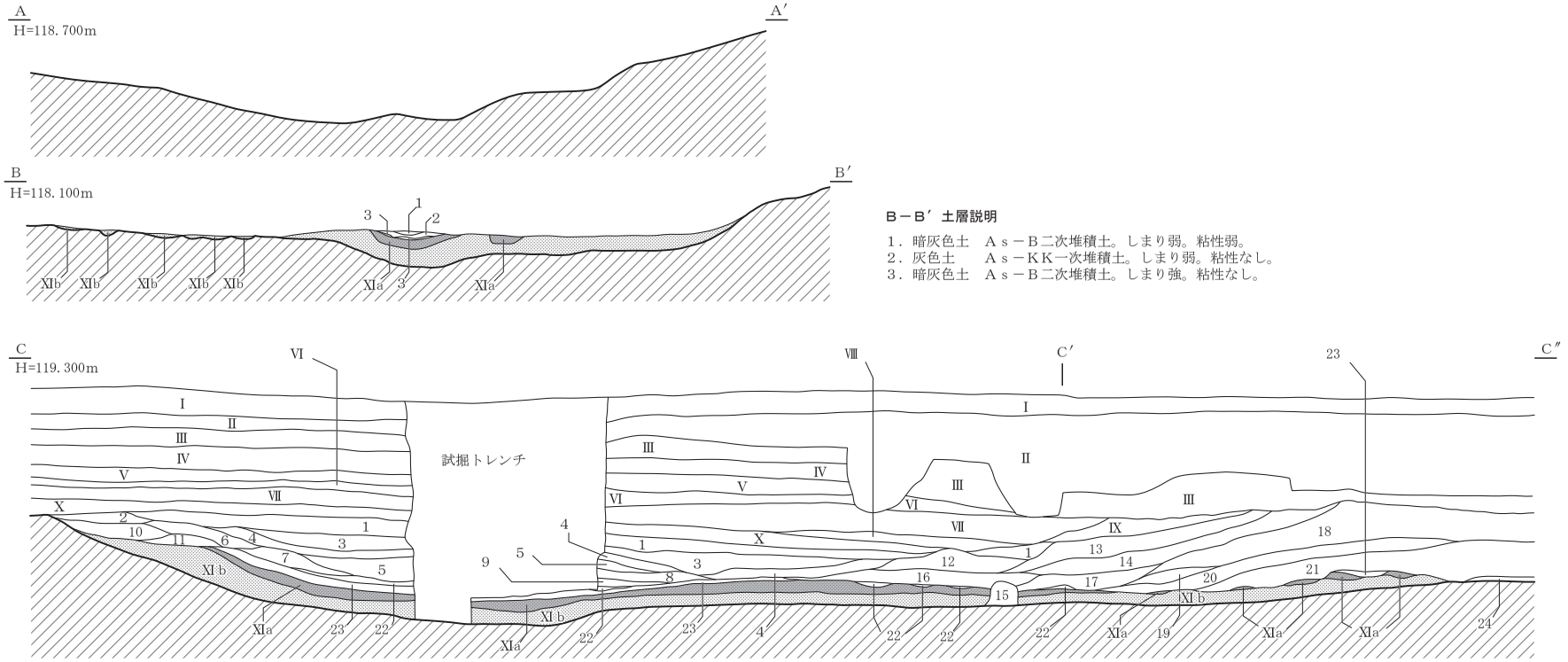


Fig. 7 1区断面図

B－B′ 土層説明

1．暗灰色土　Ａｓ－Ｂ二次堆積土。しまり弱。粘性弱。
2．灰色土　　Ａｓ－ＫＫ一次堆積土。しまり弱。粘性なし。
3．暗灰色土　Ａｓ－Ｂ二次堆積土。しまり強。粘性なし。

Ｃ－Ｃ″ 土層説明

1．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm多量、砂粒少量、Ａｓ－Ｃφ0.2cm・Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm微量含む。しまりあり。粘性あり。
2．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm多量、ロームブロックφ0.5～5.0cm中量含む。しまりあり。粘性あり。
3．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm多量、ロームブロックφ0.5～2.0cm中量、Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm微量含む。しまりあり。粘性あり。
4．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm・鉄分中量、Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
5．暗灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm中量含む。しまりあり。粘性ややあり。
6．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm多量、ロームブロックφ0.5～2.0cm中量含む。しまりあり。粘性ややあり。
7．暗灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm中量含む。しまりあり。粘性あり。
8．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm中量含む。しまりあり。粘性ややあり。
9．灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm多量含む。しまり弱。粘性弱。
10．暗褐色土　ロームブロックφ0.5～5.0cm多量、Ａｓ－Ｂφ0.2cm少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
11．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm・ロームブロックφ0.5～3.0cm中量含む。しまりあり。粘性ややあり。
12．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm少量、Ａｓ－Ｃφ0.5cm・Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
13．暗褐色土　砂粒中量、小礫φ1.0cm少量、Ａｓ－Ｂφ0.2cm・Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm・鉄分微量含む。しまりあり。粘性あり。
14．暗褐色土　砂粒中量、小礫φ1.0cm少量、Ａｓ－Ｂφ0.2cm・Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm・鉄分微量含む。しまりあり。粘性あり。
15．暗灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm多量、黒色土粘質土少量含む。しまり弱。粘性弱。
16．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ02cm中量含む。しまりあり。粘性ややあり。
17．暗灰黄褐土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm中量含む。しまりややあり。粘性やや弱。
18．暗灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm少量、Ａｓ－Ｃφ0.5cm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
19．暗灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm少量、Ａｓ－Ｃφ0.5cm・Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
20．暗灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm中量、Ａｓ－Ｃφ0.5cm・Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
21．暗灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm中量、Ｈｒ－ＦＡφ0.2～0.5cm少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
22．灰色土　Ａｓ－ＫＫ一次堆積層。しまり弱。　粘性弱。
23．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2cm多量、鉄分少量含む。しまりややあり。粘性やや弱。

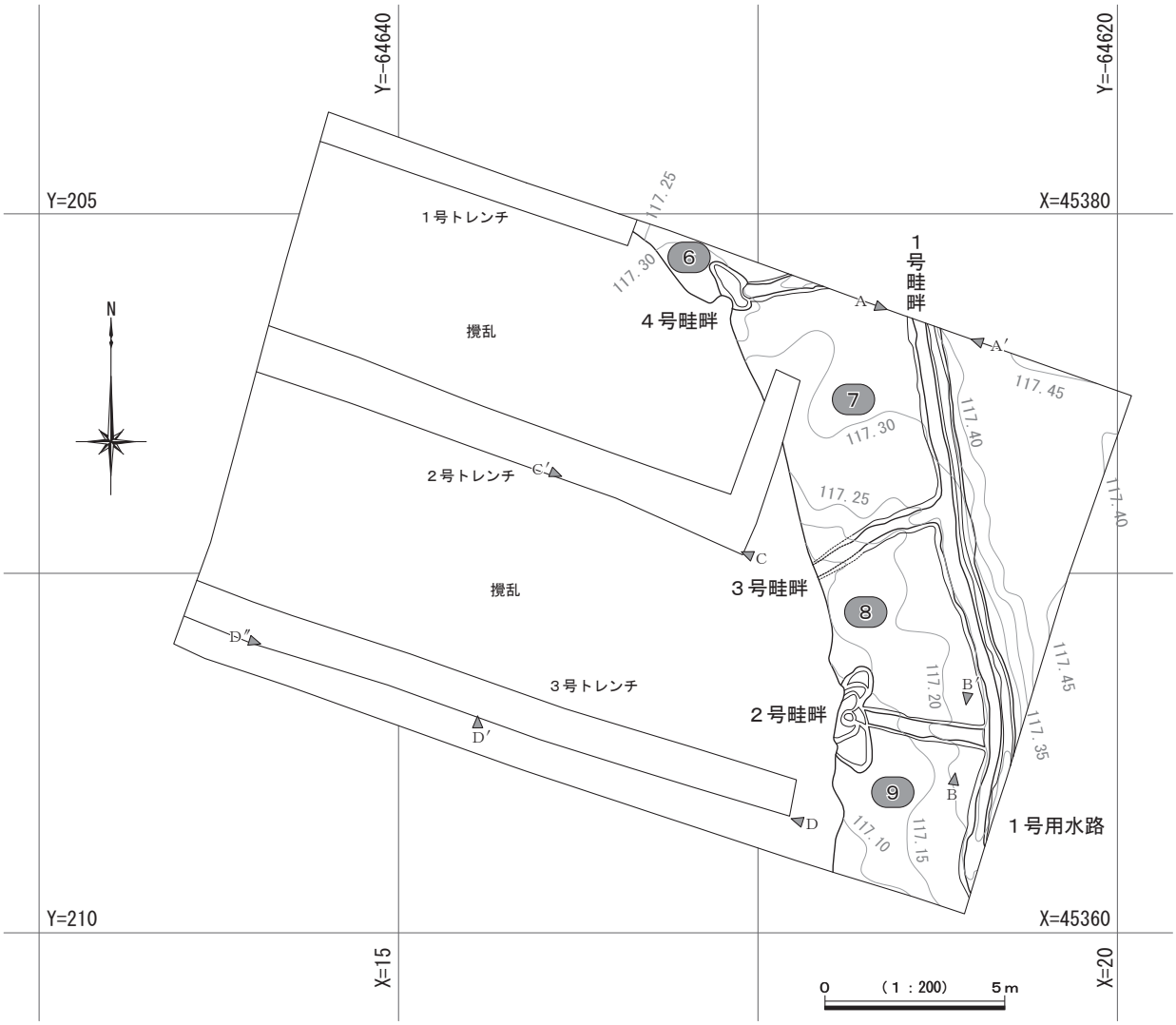
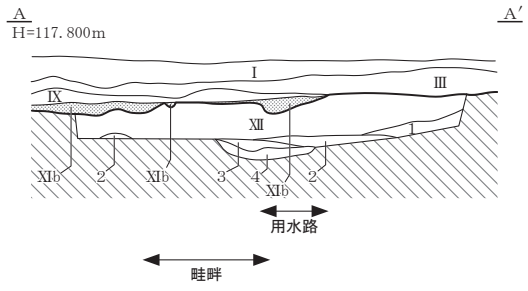
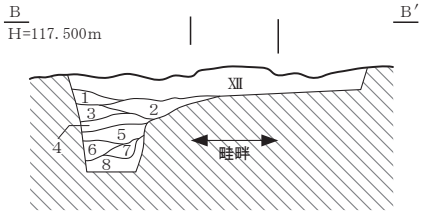


Fig. 8　2区全体図



A－A′ 土層説明

1．黄褐色土　白色粘土ブロックφ0.5～1.0㎝中量、鉄分少量、
　　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
2．黒褐色土　鉄分少量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。
　　粘性ややあり。
3．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.2㎝多量、白色粘土ブロックφ0.5～2.0㎝
　　少量含む。しまりあり。粘性あり。
4．灰色土　白色粘土ブロックφ5.0～10.0㎝多量含む。しまりあり。
　　粘性あり。



Ｂ－Ｂ′ 土層説明

1．黒色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・鉄分少量、Ｈｒ－ＦＡφ1.0㎝微量含む。
　　しまりあり。粘性あり。
2．黒色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝多量、Ｈｒ－ＦＡφ0.1㎝微量含む。
　　しまりあり。粘性あり。
3．暗褐色土　鉄分多量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりややあり。
　　粘性やや弱。
4．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝多量、砂粒中量、鉄分少量含む。
　　しまりややあり。粘性やや弱。
5．褐色土　鉄分多量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝中量含む。しまりややあり。
　　粘性ややあり。
6．黒色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
7．明灰褐色土　砂粒多量含む。しまり弱。粘性弱。
8．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝中量含む。しまりあり。粘性ややあり。

0 (1：40) 1m

Fig. 9　2区断面図（1）

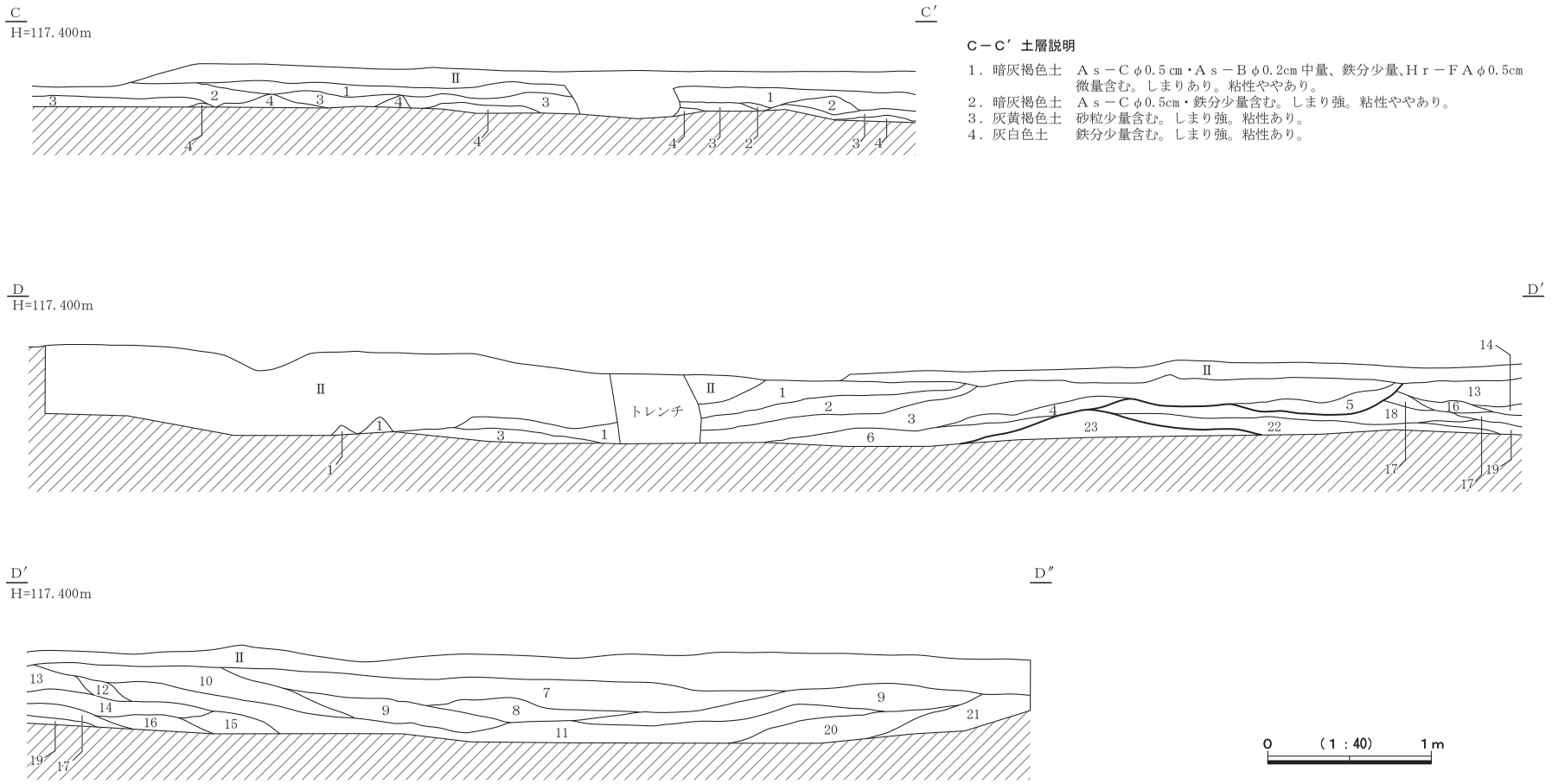


Fig.10 2区断面図（2）

C－C′ 土層説明

1．暗灰褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量、鉄分少量、Ｈｒ－ＦＡφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
2．暗灰褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・鉄分少量含む。しまり強。粘性ややあり。
3．灰黄褐色土　砂粒少量含む。しまり強。粘性あり。
4．灰白色土　鉄分少量含む。しまり強。粘性あり。

D－D″ 土層説明

1．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・Ｈｒ－ＦＡφ0.5㎝少量含む。しまりあり。粘性あり。
2．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝中量含む。しまりあり。粘性あり。上位にＨｒ－ＦＡ一次堆積層が部分的に残る。
3．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
4．暗灰色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・鉄分少量含む。しまりあり。粘性あり。
5．暗灰色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
6．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
7．にぶい黄褐色土　鉄分中量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
8．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
9．褐色土　鉄分多量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
10．暗褐色土　鉄分中量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
11．暗灰色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・鉄分少量含む。しまりあり。粘性あり。
12．暗灰色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝少量含む。しまりあり。粘性あり。
13．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・鉄分少量含む。しまりあり。粘性あり。
14．暗灰色土　鉄分中量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝少量含む。しまりあり。粘性あり。
15．にぶい黄褐色土　鉄分多量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。
16．黒褐色土　Ａｓ－Ｃ少量、鉄分微量含む。しまりあり。粘性あり。
17．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝少量、鉄分微量含む。しまりあり。粘性あり。
18．暗灰色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
19．にぶい黄褐色土　鉄分中量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・小礫φ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
20．暗灰色土　鉄分中量、Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・小礫φ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
21．暗灰色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝・鉄分微量含む。しまりあり。粘性あり。
22．黒褐色土　Ａｓ－Ｃφ0.5㎝微量含む。しまりあり。粘性あり。
23．灰白色土　鉄分少量含む。しまり強。粘性あり。

X=45340
X=45360
N
1号畦畔
2号畦畔
3号畦畔
4号畦畔
5号畦畔
6号畦畔
7号畦畔
8号畦畔
9号畦畔
10号畦畔
11号畦畔
D－1号土坑
トレンチ
トレンチ
9号畦畔
X=10
Y=-64660
X=15
Y=-64640
Y=215
Y=210
115.85
115.90
115.95
116.00
116.05
116.10
116.15
116.20
116.25
116.30
116.35
116.40
116.45
116.50
116.55
116.60
116.65
116.70
116.75
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
B混水田範囲
0 (1:200) 5m

Fig.11　3区全体図

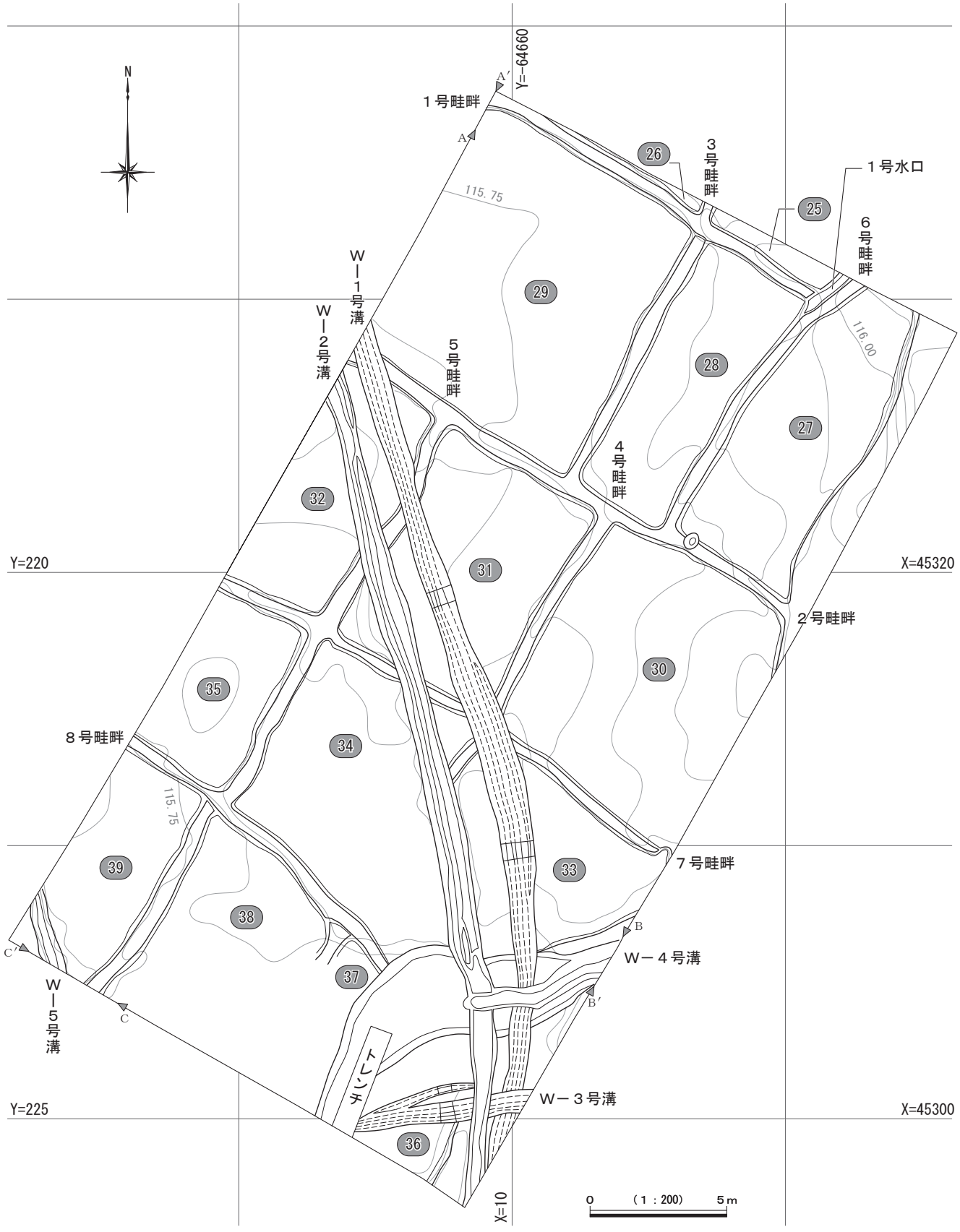
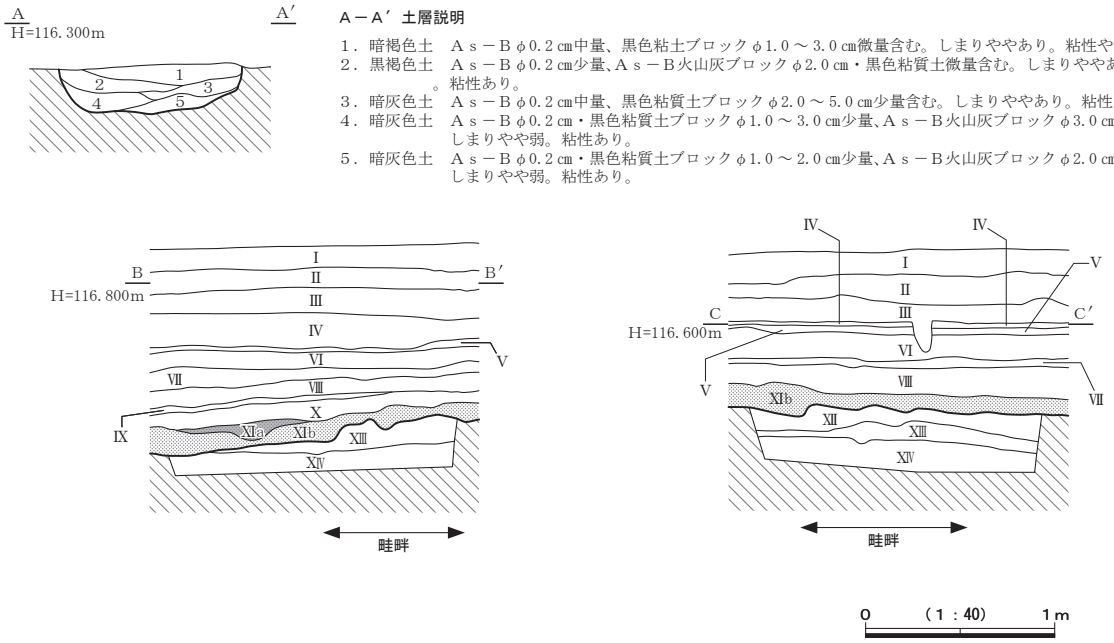

N
A′
Y=−64660
1号畦畔
A
26
3号畦畔
1号水口
115.75
25
6号畦畔
W−1号溝
W−2号溝
29
5号畦畔
116.00
28
27
4号畦畔
32
Y=220
X=45320
31
2号畦畔
30
35
8号畦畔
34
115.75
39
33
7号畦畔
38
B
C′
W−4号溝
37
B′
C
W−5号溝
トレンチ
W−3号溝
Y=225
X=45300
36
X=10
0
(1:200)
5m

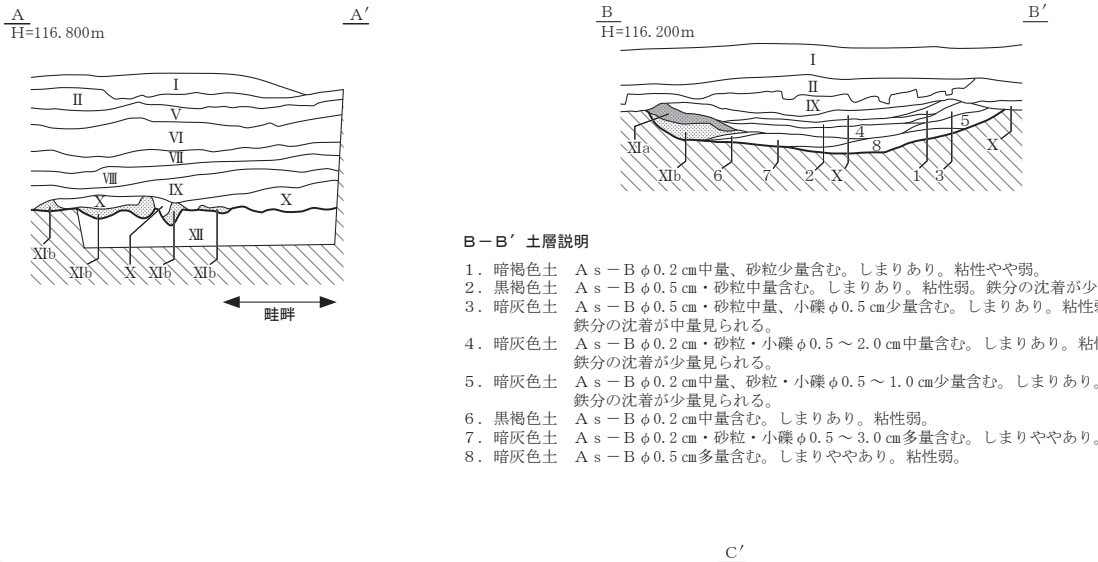
Fig.12　4区全体図



A－A′ 土層説明

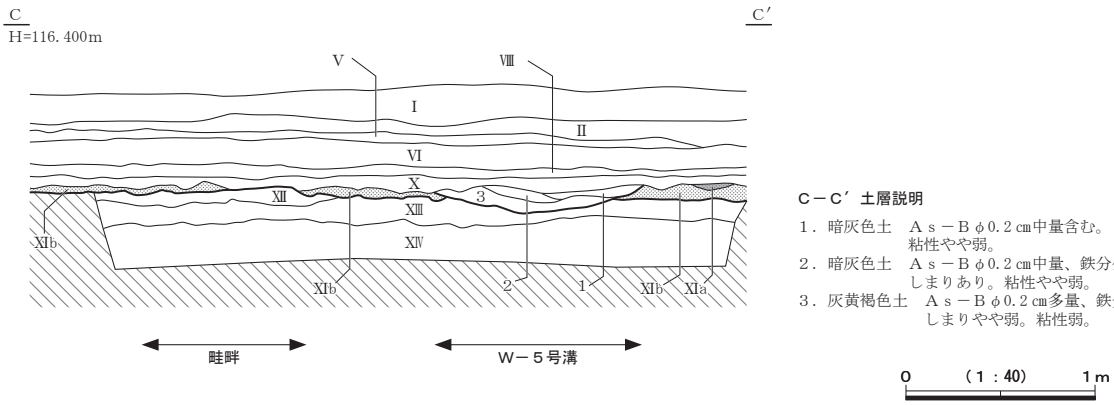
1．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量、黒色粘土ブロックφ1.0～3.0㎝微量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
2．黒褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝少量、Ａｓ－Ｂ火山灰ブロックφ2.0㎝・黒色粘質土微量含む。しまりややあり。粘性あり。
3．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量、黒色粘質土ブロックφ2.0～5.0㎝少量含む。しまりややあり。粘性あり。
4．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝・黒色粘質土ブロックφ1.0～3.0㎝少量、Ａｓ－Ｂ火山灰ブロックφ3.0㎝微量含む。しまりやや弱。粘性あり。
5．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝・黒色粘質土ブロックφ1.0～2.0㎝少量、Ａｓ－Ｂ火山灰ブロックφ2.0㎝微量含む。しまりやや弱。粘性あり。

Fig.13　３区断面図



Ｂ－Ｂ′ 土層説明

1．暗褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量、砂粒少量含む。しまりあり。粘性やや弱。
2．黒褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.5㎝・砂粒中量含む。しまりあり。粘性弱。鉄分の沈着が少量見られる。
3．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.5㎝・砂粒中量、小礫φ0.5㎝少量含む。しまりあり。粘性弱。鉄分の沈着が中量見られる。
4．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝・砂粒・小礫φ0.5～2.0㎝中量含む。しまりあり。粘性弱。鉄分の沈着が少量見られる。
5．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量、砂粒・小礫φ0.5～1.0㎝少量含む。しまりあり。粘性弱。鉄分の沈着が少量見られる。
6．黒褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量含む。しまりあり。粘性弱。
7．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝・砂粒・小礫φ0.5～3.0㎝多量含む。しまりややあり。粘性弱。
8．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.5㎝多量含む。しまりややあり。粘性弱。



Ｃ－Ｃ′ 土層説明

1．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量含む。しまりあり。粘性やや弱。
2．暗灰色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝中量、鉄分少量含む。しまりあり。粘性やや弱。
3．灰黄褐色土　Ａｓ－Ｂφ0.2㎝多量、鉄分少量含む。しまりやや弱。粘性弱。

Fig.14　４区断面図

Ⅵ　まとめ

五代東田遺跡では主にＡｓ－Ｂによって埋没した水田を確認することに至った。本遺跡は五代町及び周辺遺跡に関係する生産遺構を確認することで、赤城山南麓地域における谷底平野の土地利用形態について、その一端を窺えることができた。以下では山麓の谷部に位置する水田について考察を行う。

谷底平野の水田利用

本遺跡の調査では調査区全域で畦畔と判断できる高まりが確認できた。水田は赤城山の南麓に位置し、斜面となる自然地形を利用して水田造営が行われている。山間部における谷地形を利用した水田の調査は事例が少ないが、現代の棚田のように山間部で作られる畑や水田の造成方法からその方法を予想することができる。

現代の棚田の事例を参照すると、山間部に平坦面を作る工程は斜面の傾斜が急なところを切土し、傾斜が緩いところに盛土する作業が行われている。一定区画内で高い所を切土し、発生した土を低い部分に置き換えることでより広い面積の平坦面を確保することができたと考えらえる。この作業は斜面の傾斜によって作業量が異なったとみられる。勾配が強い所に広平い坦面を造成するには切土する土量が多くなり、作業量は膨大となる。このため、傾斜度が強い地形では広い面積の平坦面を確保することが難しかったと考えられる。一方で、勾配が弱いところでは切土する量が少ないため、盛土する量が減る。従って、得られる平坦面も傾斜度が高い斜面部よりは広かったと想定できる。

本遺跡でも基本土層からＡｓ－Ｂ直下水田面の勾配差が大きいことがわかった（Fig. ４参照）。１区か２区までが９°、２区から３区までが 17°、３区から４区にかけては４～５°の勾配度を測る。この状況から１区から２区の勾配が強と言え、横畔の間隔は６ｍと狭い。一方、３区から４区にかけては勾配が弱く、横畔の間隔は平均約 10 ｍと広い。

このことから横畔の間隔は１・２区に比較して３・４区のほうが広いことがわかる。１・２区では勾配が強かったため、広い平坦面を造成することは困難であったのであろう。一方で３・４区は勾配が弱いため、１・２区に比較すると少ない労働力で広い平坦面を得ることができたと想定できる。このような要因で、横畔が１・２区より３・４区が広くなったと考えらえる。近接している水田にもかかわらず、水田面の規模に差があることは傾斜と作業量が密接にかかわっていたからなのであろう。

以上のように本遺跡では斜面部の勾配に合わせた規模の水田面が作られたことが分かった。Ａｓ－Ｂ降下以前は谷底の平野に棚田のような水田の景観が広がっていたのであろう。

≪参考文献≫

能登健・峰岸純夫 1989『よみがえる中世　５　浅間火山灰と中世の東国』平凡社

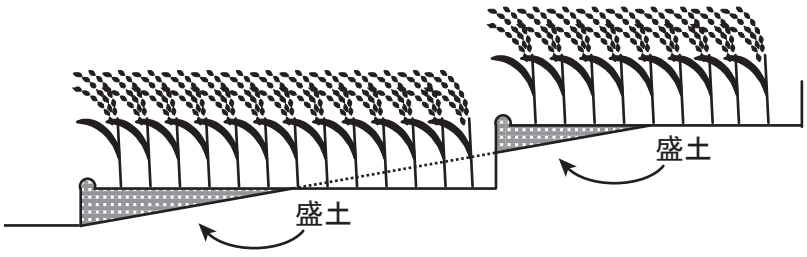


Fig. 15　谷底平野の水田利用模式図

自然科学分析

Ⅰ．五代南部団地遺跡の土層とテフラ

１．はじめに

関東地方北西部に位置する前橋市域とその周辺には、赤城、榛名、浅間など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており（町田・新井，1992，2003，2011）、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された五代東田遺跡においても、地質調査を実施して、土層の層序や遺構の層位を確認するとともに、高純度で分析用試料を採取して、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を行うことになった。調査分析の対象は、２区３号トレンチ、３区北壁、４区南壁の３地点である。

２．調査地点の土層層序

（１）２区３号トレンチ

２区３号トレンチでは、下位より暗褐色泥層（層厚 10cm 以上）、灰色砂層（層厚 16cm）、黒泥層（層厚 10cm）、灰色砂層（レンズ状，最大層厚１cm）、色調がとくに暗い暗灰色泥層（層厚 16cm）、比較的粗粒の白色軽石を含む黄色細粒火山灰層（層厚３cm，軽石の最大径 27mm）、暗灰色泥層（層厚８cm）、灰色盛土（層厚 47cm）が認められる。

（２）３区北壁

３区北壁では、下位より黄灰色土ブロックに富む灰色泥層（層厚 21cm）、黒色泥層（層厚 18cm）、灰白色軽石に富む黒灰色泥層（層厚 16cm，軽石の最大径３mm）、比較的粗粒の白色軽石混じり暗灰褐色土（層厚７cm，軽石の最大径 17mm）、比較的粗粒の白色軽石を含む暗灰褐色土（層厚９cm，軽石の最大径 18mm）、灰色土（層厚 34cm）を認めることができた（図２）。発掘調査では、これらのうち、灰白色軽石に富む黒灰色泥層の下位から土坑が検出されている。

（３）４区南壁

４区南壁では、下位より黒泥層（層厚 18cm 以上）、細粒の白色軽石を含むやや灰色がかった黒色泥層（層厚９cm，軽石の最大径４mm）、細粒の白色軽石を含む黒灰色泥層（層厚 18cm，軽石の最大径４mm）、暗灰色泥層（層厚９cm）、白色粗粒火山灰を含むやや暗い灰色泥層（層厚 10cm）、暗灰色泥層（層厚６cm）、成層したテフラ層（層厚 5.5cm）、色調がとくに暗い暗灰色土（層厚６cm）、灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚８cm）、細粒の白色軽石を含む黄灰色土（層厚 13cm，軽石の最大径３mm）、細粒の白色軽石を含む黄色土（層厚６cm）、灰色土（層厚 22cm）が認められる（図３）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色細粒火山灰層（層厚 0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚 0.5cm）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚 0.8cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚３cm）、桃色細粒火山灰層（層厚１

cm）から構成される。発掘調査では、このテフラ層に覆われた水田遺構が検出されている。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

３地点において、テフラ層ごと、また層境にかからないように基本的に５cmおきに設定採取された試料のうち、12試料を対象として、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出同定を実施した。分析方法は次のとおりである。

１）分析対象の試料のうち、テフラ層をのぞく試料について各８g、またテフラ層の試料について３～５gを秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下で観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。テフラ検出分析で検出されたテフラ粒子の多くは、次の３種類である。これらについては、岩相などからその起源を知ることができる。

タイプ１：スポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石（最大径4.2mm）や、その細粒物であるスポンジ状軽石　型ガラス。班晶には、強磁性鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

タイプ２：さほど発泡の良くない白色、わすかに灰色をおびた白色、灰色の軽石（最大径6.3mm）や、それ　らの細粒物であるスポンジ状軽石型ガラス。班晶には、強磁性鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や角閃　石が認められる。

タイプ３：比較的良く発泡した、淡灰色、淡褐色、褐色の比較的細粒の軽石（最大径3.3mm）や、その細粒　物であるスポンジ状軽石型ガラス。班晶には、強磁性鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が認　められる。

これらのほかには、２区３号トレンチの試料４で、灰色や無色透明の中間型（塊状，破片状）ガラスが少量認められる。

４．考察

（１）指標テフラとの同定

テフラ検出分析により検出されたテフラのうち、タイプ１は、岩相から、３世紀後半に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-C，荒牧，1968，新井，1979，町田・新井，1992，坂口，2010）と考えられる。このことから、２区３号トレンチで試料３が採取された軽石層は、As-Cに同定される。

タイプ２のテフラに関しては、岩相から、６世紀初頭に榛名火山から噴出したと推定されている榛名渋川テフラ層（Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992など）、または、６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ッ岳伊香保テフラ層（Hr-FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992など）に同定される。さらに、２区３号トレンチの試料１で認められた白色のスポンジ状軽石型ガラスや、角閃石は、これらのテフラより下位にあることから、５世紀に榛名火山から噴出した榛名有馬火山灰（Hr-AA，町田ほか，1984）に由来する可能性がある。

これらのことに、細粒火山灰を多く含む層相を合わせると、２区３号トレンチで試料１が採取されたテフラ層は、Hr-FAに同定される。

タイプ３のテフラは、岩相から、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992 など）に由来すると考えられる。したがって、４区南壁で試料２が採取された成層したテフラ層は、層相も合わせると、As-B に同定できる。

また、この As-B の上位の、試料１が採取された暗灰色土中に含まれる粗粒火山灰に関しては、層位から、1783（天明３）年に浅間火山から噴出した浅間Ａ軽石（As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992 など）かも知れない。なお、２区３号トレンチの試料４から少量検出された灰色や無色透明の中間型ガラスは、岩相から As-C より下位の浅間系テフラに由来する可能性がある。

（２）指標テフラと遺構の層位関係について

２区３号トレンチでは、腐植質堆積物中に、下位より砂層、As-C、砂層、Hr-FA が検出された。このうち、As-C と Hr-FA の間に層位がある砂層には、Hr-AA に由来する可能性のある火山ガラスや角閃石が含まれている。したがって、上位の砂層は、Hr-AA 降灰後（おそらく３世紀後半あたり）に形成された可能性が考えられる。

３区北壁では、腐植質堆積物の中に、下位より As-C の濃集層や、Hr-FA や Hr-FP が混在する土層が認められた。発掘調査では、これらのうち、As-C の濃集層の下位から土坑が検出されている。したがって、この土坑は、As-C の人為的除去が行われていないかぎり、As-C より上位で、Hr-FA より下位と推定される。

４区南壁では、腐植質堆積物中に、下位より Hr-FA および Hr-FP、As-B が認められた。したがって、発掘調査により、テフラ層直下から検出された水田面は、As-B に覆われた水田遺構と考えることができる。

５．まとめ

五代東田遺跡において地質調査を実施するとともに、テフラ分析（テフラ検出分析）を実施した。その結果、下位より、浅間Ｃ軽石（As-C, ３世紀後半）、榛名有馬火山灰（Hr-AA, ５世紀）を含む可能性のある砂層、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, ６世紀初頭）、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, ６世紀中葉）、浅間Ｂテフラ（As-B）などを認めることができた。発掘調査で検出された水田面は As-B 直下、またその下位の土坑は As-C より上位で Hr-FA より下位の可能性がある。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p. 1-79.
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no. 53，p. 41-52.
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no. 14，p. 1-45.
町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－．科学，46，p. 339-347.
町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」．東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」．東京大学出版会，336p.
町田　洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第２刷）」．東京大学出版会，336p.
町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究に関係するテフラのカタログ．古文化財編集委員会編「文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p. 865-928.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p. 103-119.
坂口　一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向－中居町一丁目遺跡 H22 の水田耕作地と周辺集落との関係－．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡３」，p. 17-22.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p. 297-312.
早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，p. 256-267.

表1　五代東田遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
		量	色調	最大径	量	形態	色調	（不透明鉱物以外）
2区3号トレンチ	1	**	白，（灰）白，灰	5.6	***	pm（sp）	白，（灰）白，灰	opx，am
	2				（*）	pm（sp）	白，灰白	opx，cpx，（am）
	3	*	灰白	4.2	***	pm（sp）	灰白	opx，cpx
	4				*	md	灰，無色透明	opx，cpx
3区北壁	1	**	白，灰白	6.3，3.1	***	pm（sp）	白，灰白	opx，am，（cpx）
	4	*	灰白	2.1	***	pm（sp）	灰白	opx，cpx
	5				（*）	pm（sp）	灰白	opx，cpx，am
4区南壁	2	*	淡灰，淡褐，褐	3.3	**	pm（sp）	淡灰，淡褐，褐	opx，cpx
	5	（*）	白	2.1	（*）	pm（sp）	白	opx，cpx，am
	7	*	白，灰白	5.3，2.8	**	pm（sp）	白，灰白	opx，cpx，am
	9	*	白	4.3	**	pm（sp）	白＞灰白	opx，am，cpx
	13	*	（灰）白	6.1	**	pm（sp）	白，（灰）白	opx，am，（cpx）

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*：少ない，（*）：非常に少ない．

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石．　重鉱物の（）は，非常に量が少ないことを示す．

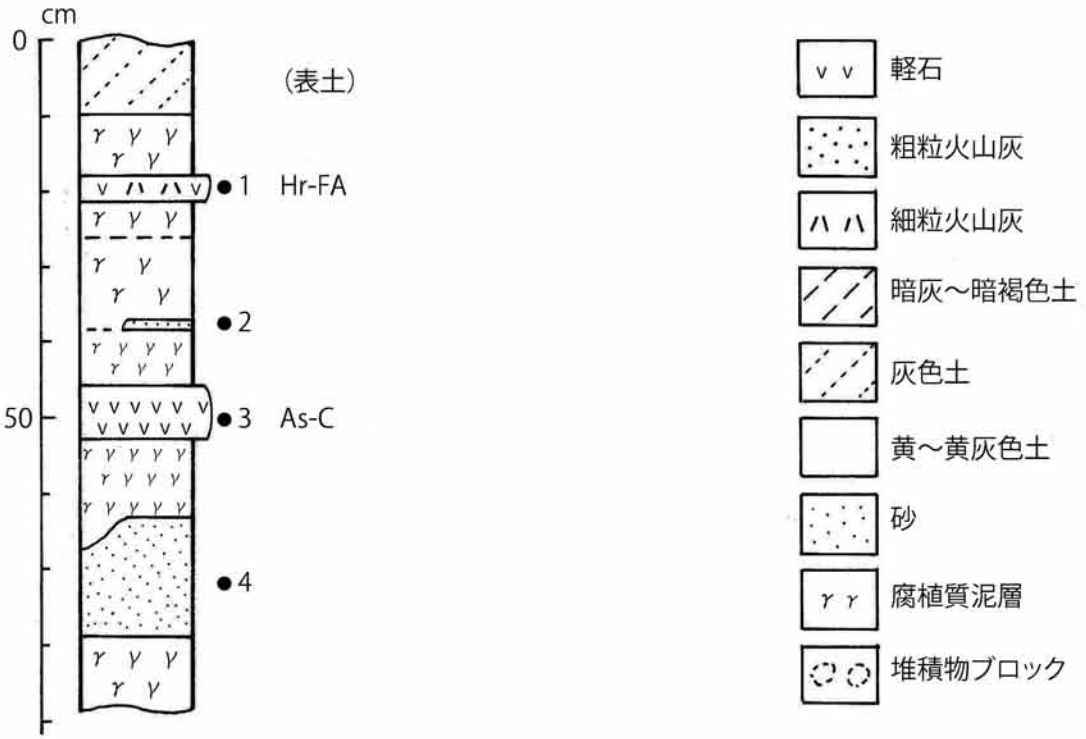


図1　2区3号トレンチの土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析の試料番号.

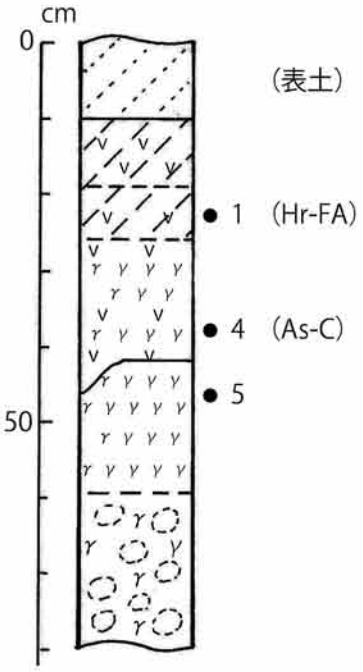


図2　3区北壁の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位. 数字:テフラ分析の試料番号.

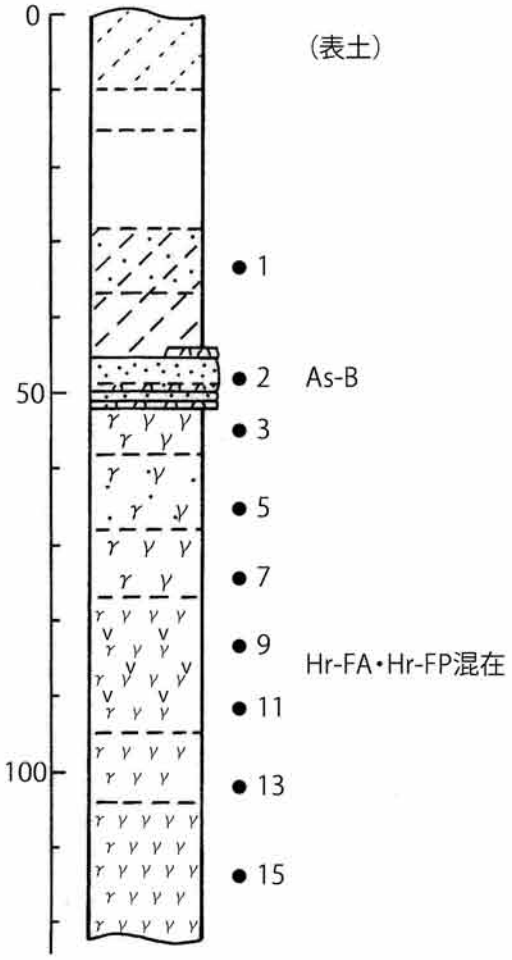


図３　４区南壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位．数字：テフラ分析の試料番号．

五代東田遺跡テフラ分析写真図版

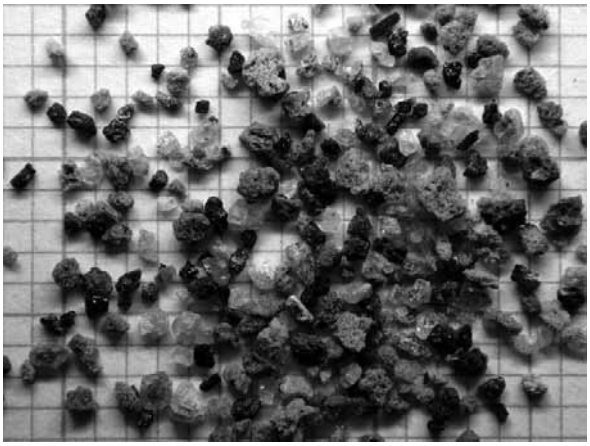


写真１　４区南壁・試料２（As-B）.
背景は１㎜メッシュ.
比較的発泡の良い淡褐・淡灰・褐色の軽石や軽石型ガラスが多く含まれている.

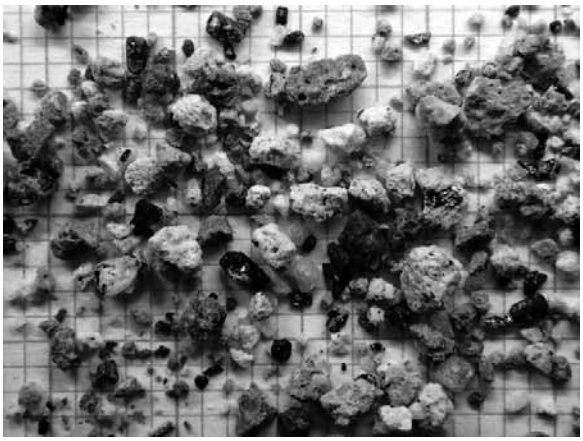


写真２　２区３号トレンチ・試料１（Hr-FA）
背景は１㎜メッシュ.
さほど発泡の良くない白色の軽石や軽石型ガラスが多く含まれている.

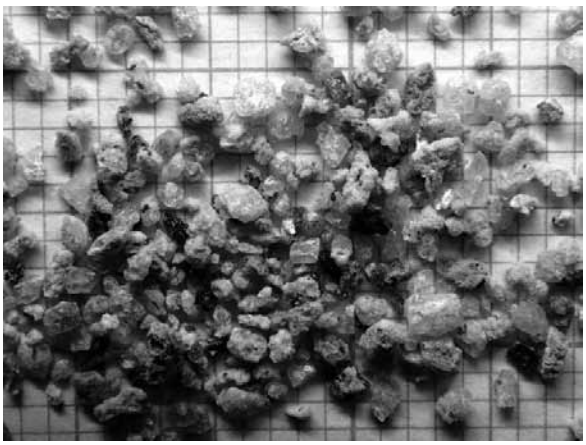


写真３　２区３号トレンチ・試料３（As-C）.
背景は１㎜メッシュ.
よく発泡した灰白色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている.

Ⅱ．五代東田遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（Si0 ２）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山,2000)。また､イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山，1984)。

２．試料

分析試料は、２区３号トレンチおよび４区南壁から採取された計４点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾)。
２）試料約１ｇに対し直径約 40 μｍのガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量)。
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理。
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散。
５）沈底法による 20 μｍ以下の微粒子除去。
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成。
７）検鏡・計数。

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである(未分類等を除く)。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属)、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など)、ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

５．考察

（１）稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 /g として検討を行った。

１）２区３号トレンチ

As-C 直下層（試料３）から Hr-FA 直下層（試料２）までの層準について分析を行った。その結果、Hr-FA 直下層（試料２）からイネが検出された。密度は 1,300 個 /g と比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

２）４区南壁

As-B 直下層（試料１）について分析を行った。その結果、イネが 4,400 個 /g と比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（２）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

（３）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、各層準ともネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、および多角形板状（ブナ科コナラ属など）などの樹木起源も認められた。おもな分類群の推定生産量によると、下位の試料４と試料３ではヨシ属、試料２と試料１ではネザサ節型が優勢となっており、試料１では

イネも多くなっている。

以上の結果から、As-C の直下層から直上層にかけては、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）、キビ族、メダケ属（おもにネザサ節）などが生育し、遺跡周辺にはコナラ属などの樹木が分布していたと推定される。Hr-FA 直下層から As-B 直下層にかけては、湿潤なところを利用して水田稲作が行われていたと考えられ、周辺ではメダケ属（おもにネザサ節）が増加したと推定される。

６．まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、４区南壁の As-B 直下層ではイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、２区３号トレンチの Hr-FA 直下層でも稲作が行われていた可能性が認められた。

文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，no. 9，p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，no. 17，p. 73-85.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，no. 19，p. 69-84.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．辻　誠一郎編「考古学と植物学」．同成社，p. 189-213.

表１　五代東田遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

		地点・試料	２区		４区
分類群	学名	2	3	4	1
イネ科	Gramineae				
イネ	*Oryza sativa*	13			44
ヨシ属	*Phragmites*	7	52	20	13
シバ属型	*Zoysia* type				6
キビ族型	Paniceae type	13	7	7	13
ススキ属型	*Miscanthus* type	39	26	40	32
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type	59	98	60	63
ウシクサ族Ｂ	Andropogoneae B type				6
タケ亜科	Bambusoideae				
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	7			13
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	189	105	94	360
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.				6
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	7		7	6
マダケ属型	*Phyllostachys*				6
未分類等	Others	26	13	7	19
樹木起源	Arboreal				
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (*Quercus* etc.)	7	7	7	13
その他	Others	13	13	7	6
植物珪酸体総数	Total	379	321	248	606

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	0.38			1.30
ヨシ属	*Phragmites*	0.41	3.31	1.27	0.80
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.49	0.32	0.50	0.39
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.08			0.15
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.91	0.50	0.45	1.73
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.				0.05
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02		0.02	0.02

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	8			8
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	91	100	96	89
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.				2
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	2		4	1
メダケ率	Medake ratio	98	100	96	97

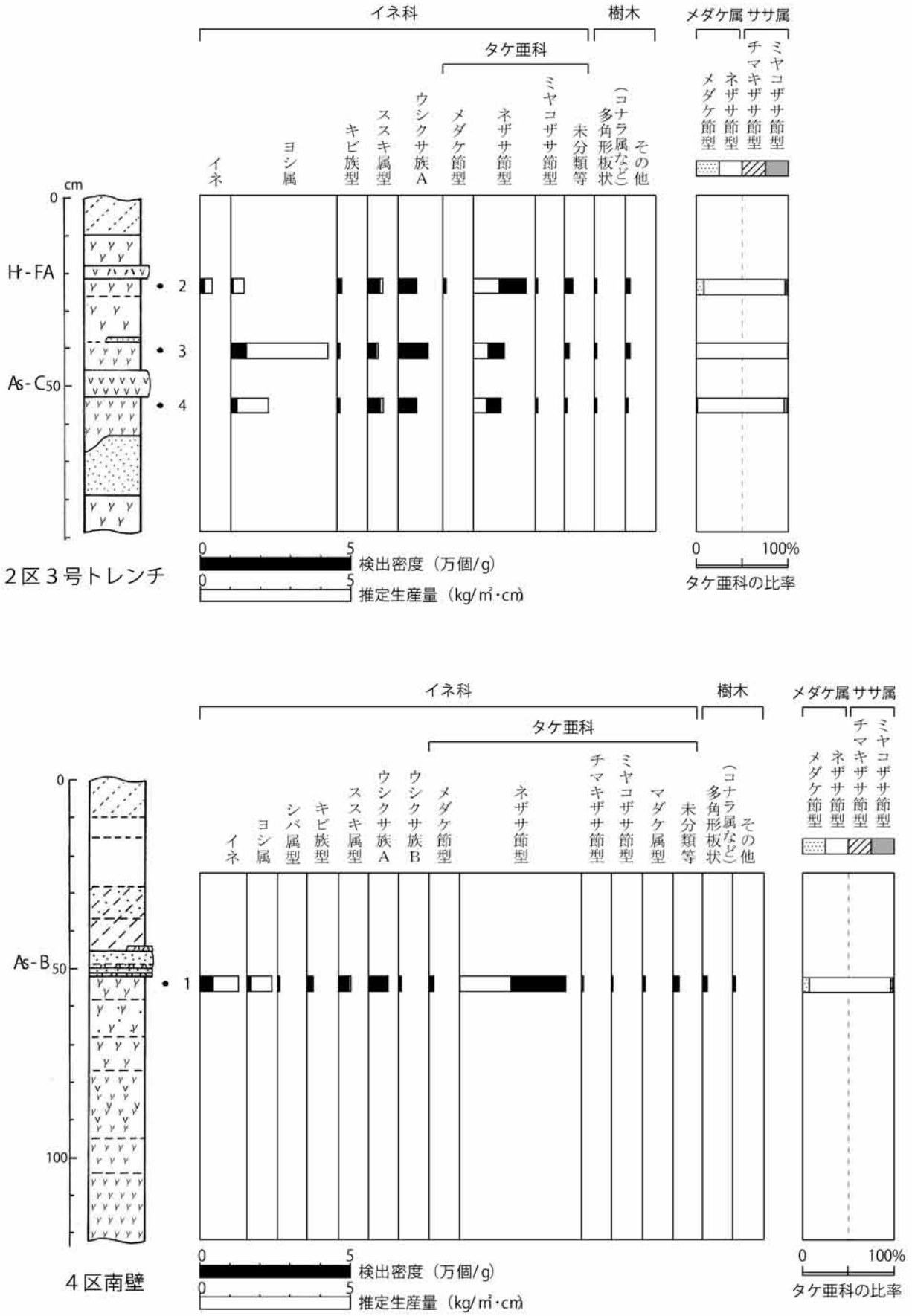
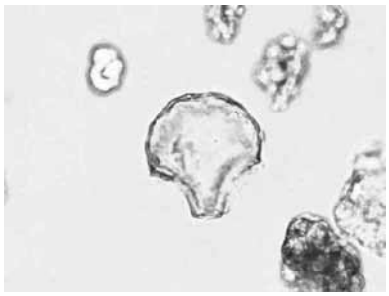
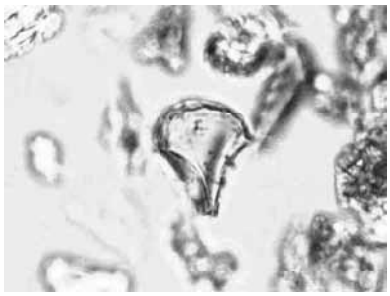


図1　五代南部団地遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果（おもな分類群）

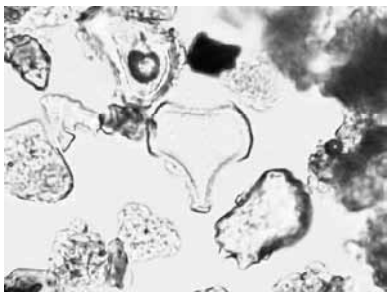
植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

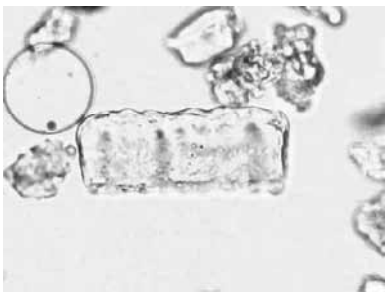

イネ

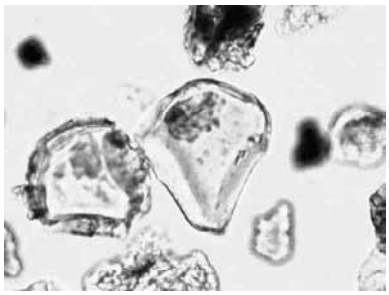

イネ

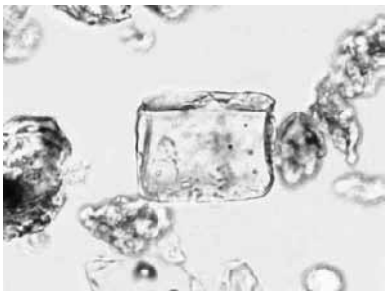
ヨシ属

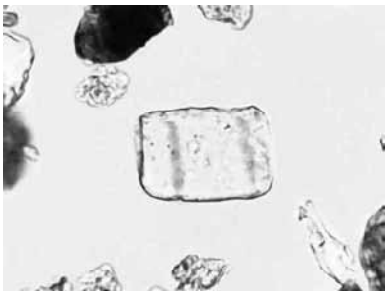
ヨシ属

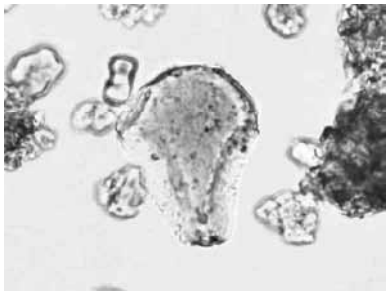

シバ属型

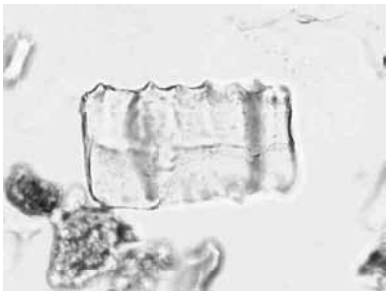

キビ族型

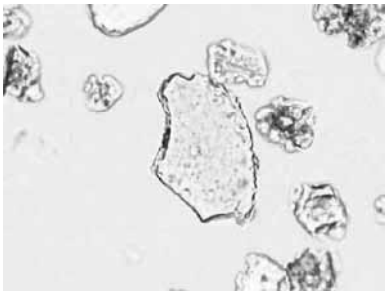

ススキ属型

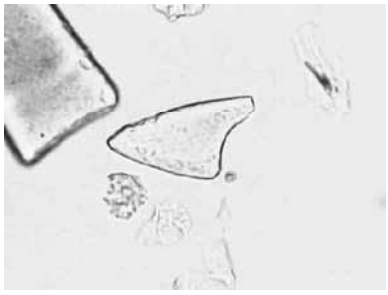

ススキ属型


ウシクサ族A

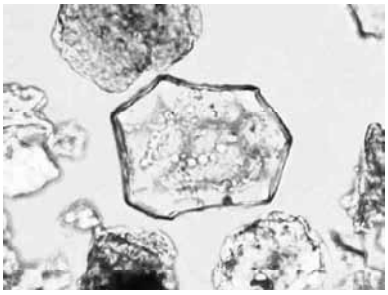

ウシクサ族B


ネザサ節型


チマキザサ節型


表皮毛起源

棒状珪酸体


多角形板状

50 μ m

写真図版

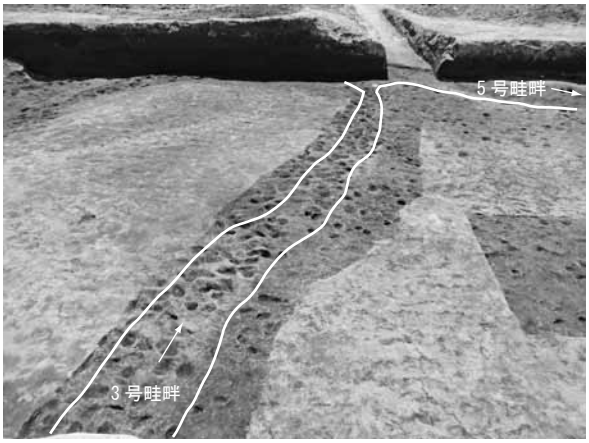
調査区と赤城山(南から)

五代東田遺跡全景 (上が東)

PL.2

1区全景 (上が東)

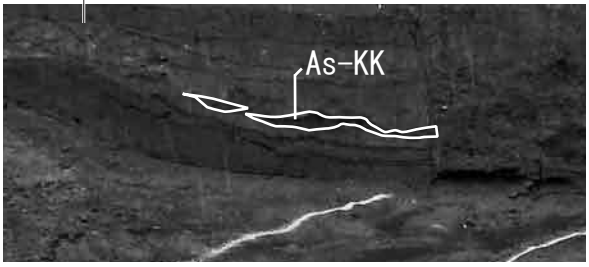
1区全景 (南から)



1区3号畦畔全景 (西から)

1区1号用水路断面 (北西から)

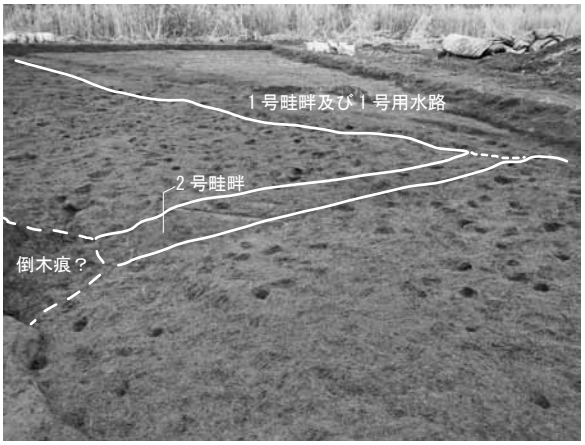
1区基本層序 (東から



1区1号用水路Ａｓ－ＫＫ拡大

２区全景 (上が北)

２区全景 (南東から)

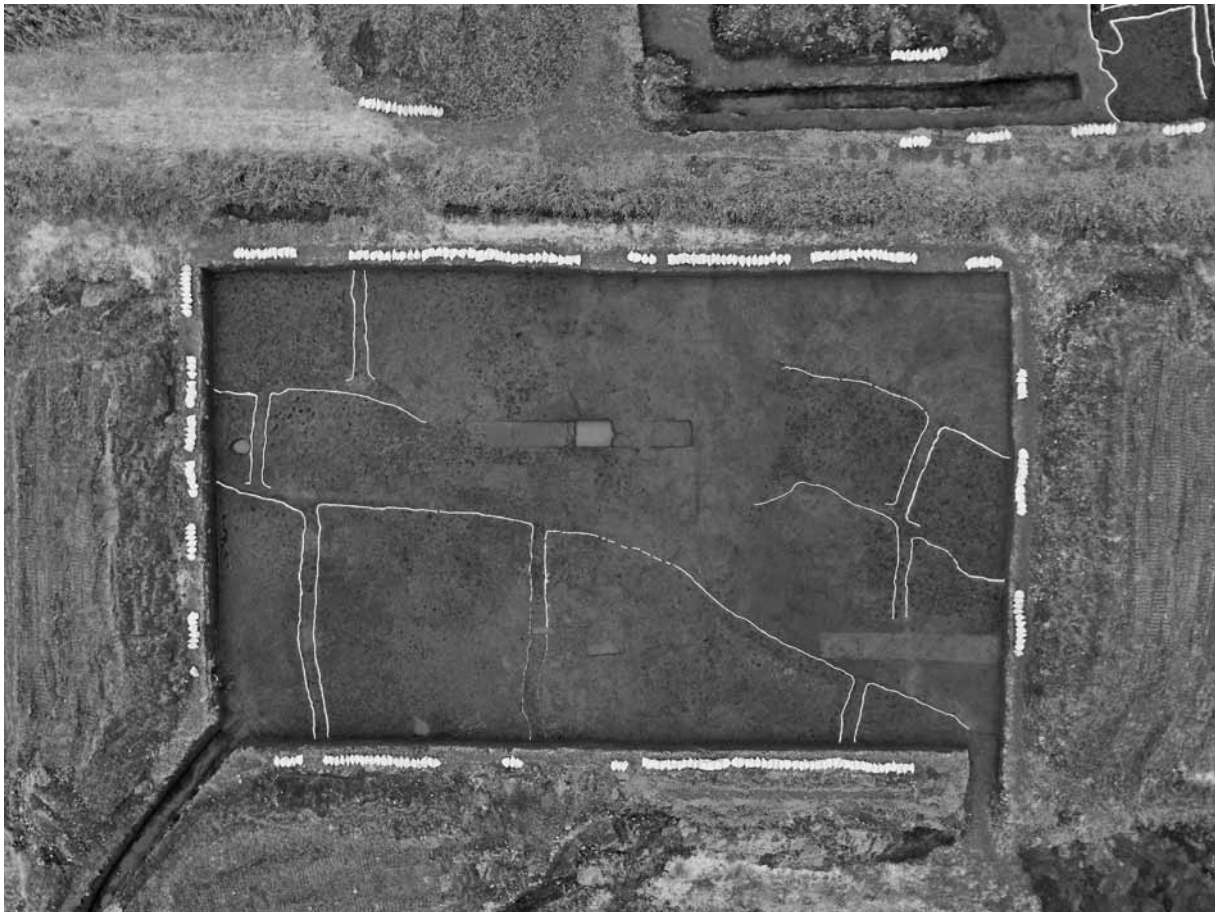


２区２号畦畔 (南西から)

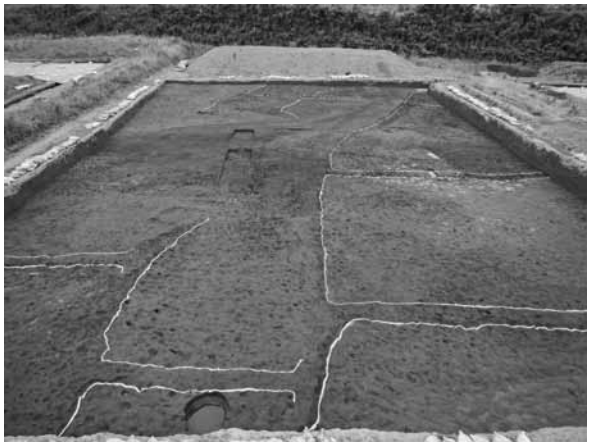
２区１号用水路及び１号畦畔断面 (南から)

２区Ａｓ－Ｂ下水田跡工具痕検出状況 (西から)

PL.4



3区全景 (上が北)



3区全景 (東から)

3区3号畦畔全景 (南東から)

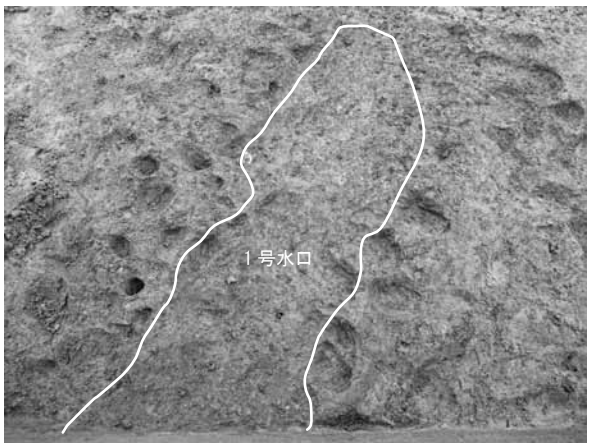
3区D－1完掘状況 (南から)

3区基本層序 (北から)

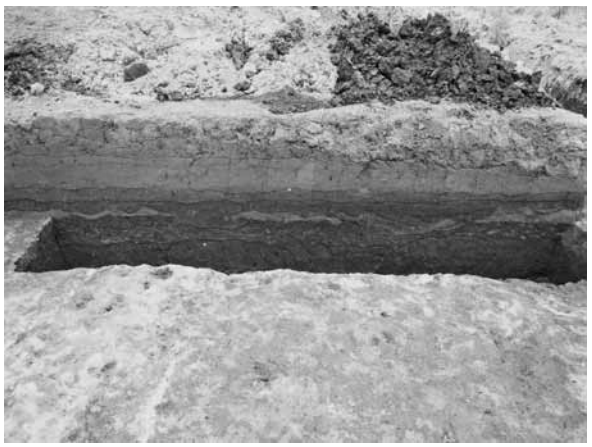
4区全景 (上が東)

4区全景 (南から)

4区1号溝検出状況 (南東から)



4区1号水口 (北から)



4区5号畦畔及び5号溝断面 (北から)

PL.6

表土除去状況 (北西から)

簡易トイレ設置状況 (南西から)

プレハブ設置状況 (南東から)

作業風景 (南から)

作業風景 (北西から)

測量風景 (南西から)

空撮風景 (東から)

プラント・オパール調査風景 (北西から)

抄　録

フ リ ガ ナ	ゴダイヒガシダイセキ
書　　名	五代東田遺跡
副 書 名	五代南部工業団地（拡張）土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	小峰　篤　李スルチョロン　日沖剛史
編 集 機 関	有限会社毛野考古学研究所 〒 379-2146　群馬県前橋市公田町 1002 番地 1　　TEL　027-265-1804
発 行 機 関	前橋市教育委員会 〒 371-0853　群馬県前橋市総社町３-11- ４　　TEL　027-280-6511
発 行 年 月 日	平成 29 年３月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
五代東田遺跡（ごだいひがしだいせき）	群馬県前橋市五代町（ぐんまけんまえばししごだいまち）967 他（ほか）	10201	28C48	36° 24′ 35″	139° 06′ 3″	20160517 ～ 20160718	2,030 ㎡	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五代東田遺跡	水田跡	古墳時代中期末～後期初頭	水田跡		古墳時代中期末から現代に至るまでの傾斜地を利用した水田跡が検出された。
		平安時代末期	水田跡・用水路		
		Ａｓ－Ｂ降下以降	水田跡・溝・土坑		
		近現代以降	溝		

五代東田遺跡

五代南部工業団地（拡張）土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 29 年 3 月 21 日印刷
平成 29 年 3 月 24 日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／前 橋 市 教 育 委 員 会
印刷／朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社